

貝塚市埋蔵文化財調査報告第7集

貝塚市遺跡群発掘調査概要 V

1983・3

貝塚市教育委員会

は し が き

貝塚市が昭和57年度国庫補助事業として実施してまいりました埋蔵文化財発掘調査の一部をここに報告するものであります。

調査の性格上、開発行為に伴う緊急発掘調査がそのほとんどであり、調査にあたっては面積的あるいは期間的制約の加わる中での調査が多く、十分な成果が得られていないのが実情であります。

こうした状況下ではありますが、本年度の調査成果として一部発掘調査を実施しました地区の概要を報告するとともに本書が地域の歴史を知る上で多少なりともお役に立てる一助となれば幸いと存じます。

なお、今回の調査にあたり地元の方々をはじめ関係者各位に多大なご協力をいただき末筆ではあります但深く感射いたします。

昭和 58 年 3 月

貝塚市教育委員会

教育長 岡 根 和 雄

例 言

1. 本書は貝塚市教育委員会が昭和57年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当実施した貝塚市遺跡群発掘調査概要である。
2. 調査は貝塚市教育委員会社会教育課 西岡巖を担当者として昭和57年4月1日に着手し、昭和58年3月31日に終了した。
3. 調査の実施と整理にあたっては、嘉積由彦・佐々木義明・西分平和・吉川安浩・池内明美・大谷泰代・岡本直樹・太田京美・藤原篤子・松田智子・吉田房子・田中和枝、諸氏の協力を受けたほか、現地調査に際しては土地所有者より多大の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の作成にあたっては西岡が編集を行い、整理作業を参加者全員で行ったほか、図面トレースを藤原が、遺物実測を池内・藤原・松田が担当した。

目 次

はしがき

例 言

目 次

昭和57年度調査一覧表

貝塚市遺跡分布図

第一章 加治・神前・畠中遺跡の調査	1
第一節 位置と環境	1
第二節 遺 構	2
第三節 遺 物	4
第四節 ま と め	6
第二章 地藏堂廃寺跡の調査	7
第一節 位置と環境	7
第二節 遺 構	8
第三節 遺 物	12
第四節 ま と め	13
第三章 仮称今池遺跡の調査	28
第一節 位置と環境	28
第二節 遺 構	29
第三節 遺 物	31
第四節 ま と め	33

図版目次

図版目次

加治・神前・畠中遺跡

- 図版1 遺構 調査区全景
建物2
- 図版2 遺構 建物1、溝1
同上
- 図版3 遺構 ビット20内遺物出土状況
溝1土層断面
- 図版4 遺物

地蔵堂廃寺跡

- 図版5 航空写真
- 図版6 遺構 遺構全景
同上
- 図版7 遺構 C区全景
D区全景
- 図版8 遺構 A区近世基壇瓦堆積状況
同上部分
- 図版9 遺構 F区全景
G区全景
- 図版10 遺物 軒丸瓦
- 図版11 遺物 軒丸瓦
- 図版12 遺物 軒丸瓦
- 図版13 遺物 軒丸瓦
- 図版14 遺物 軒丸瓦
- 図版15 遺物 軒平瓦
- 図版16 遺物 軒平瓦
- 図版17 遺物 軒平瓦
- 図版18 遺物 軒平瓦
- 図版19 遺物 文字瓦

今池遺跡

- 図版20 遺構 遺構検出状況
同上
- 図版21 遺構 遺構全景
同上
- 図版22 遺構 溝1・2
溝1内土層断面

- 図版23 遺構 溝1内遺物出土状況(小形丸底壺)
溝1内遺物出土状況
- 図版24 遺物 溝1出土遺物

挿図目次

加治・神前・畠中遺跡

- 第1図 調査位置図……………1
- 第2図 遺構実測図……………3
- 第3図 遺物実測図……………5

地蔵堂廃寺跡

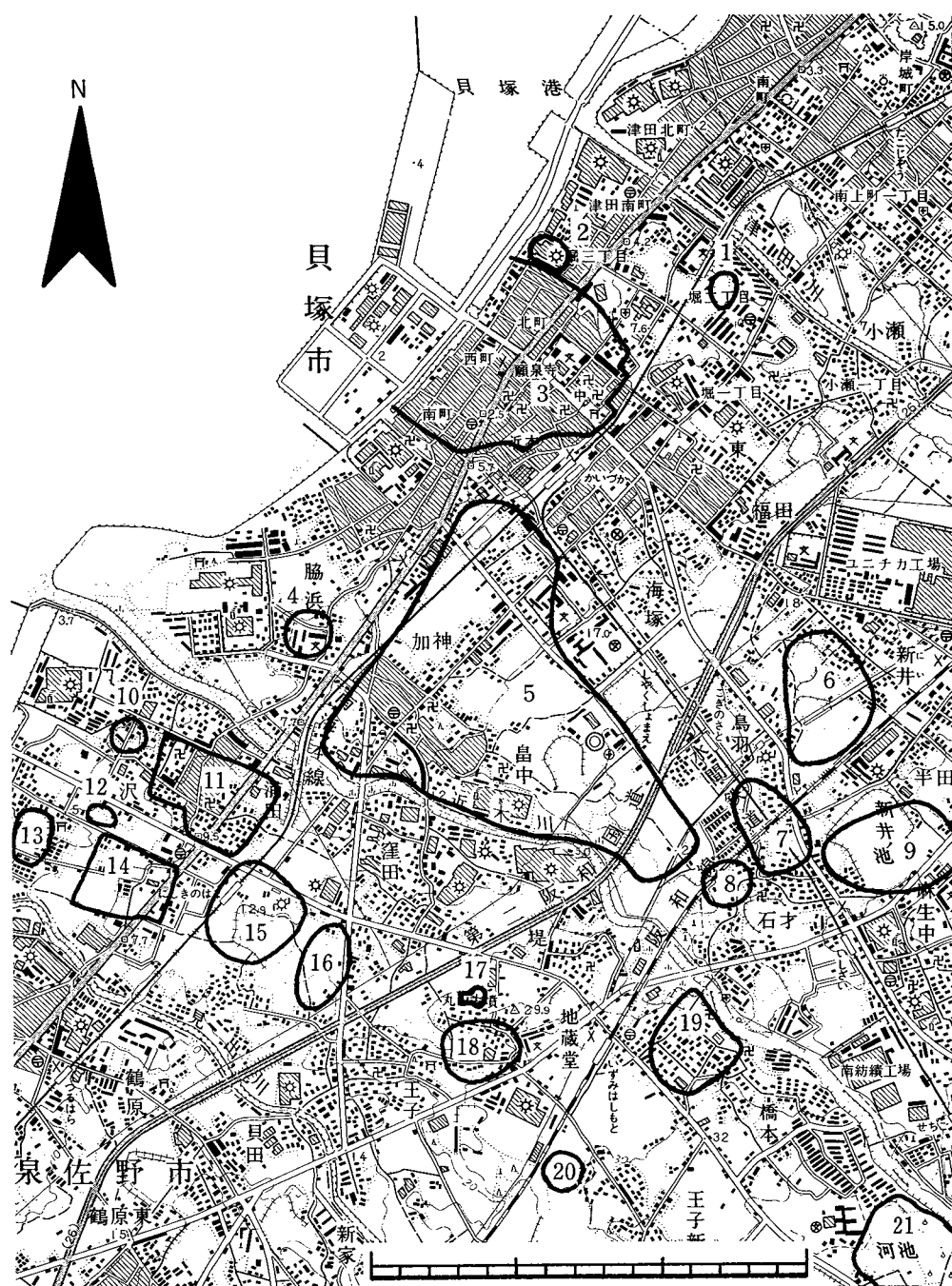
- 第4図 調査位置図……………7
- 第5図 調査区域設定図……………9
- 第6図 F区遺構実測図……………10
- 第7図 A～E区遺構実測図……………11
- 第8図 軒丸瓦拓影・実測図……………17
- 第9図 軒丸瓦拓影・実測図……………18
- 第10図 軒丸瓦拓影・実測図……………19
- 第11図 軒丸瓦拓影・実測図……………20
- 第12図 軒丸瓦拓影・実測図……………21
- 第13図 軒丸瓦拓影・実測図……………22
- 第14図 軒丸瓦拓影・実測図……………23
- 第15図 軒平瓦拓影・実測図……………24
- 第16図 軒平瓦拓影・実測図……………25
- 第17図 軒平瓦拓影・実測図……………26
- 第18図 軒平瓦拓影・実測図……………27
- 表1 軒丸瓦観察表……………15
- 表2 軒平瓦観察表……………16

今池遺跡

- 第19図 調査位置図……………28
- 第20図 遺構実測図……………30
- 第21図 溝1土層断面図……………31
- 第22図 溝1出土遺物実測図……………32
- 第23図 石器実測図

昭和57年度 発掘調査一覧表

番号	遺 跡 名	調 査 位 置	目 的
1	加治・神前・畠中遺跡	貝塚市畠中 2 - 103	個人住宅建設工事
2	地藏堂廃寺跡	貝塚市地藏堂 237	御堂建替工事
3	沢共同墓地遺跡	貝塚市沢 918 - 9、-10	個人住宅建設工事
4	沢共同墓地遺跡	貝塚市沢 918 - 6、-11	個人住宅建設工事
5	沢共同墓地遺跡	貝塚市沢 918 - 7、-12	個人住宅建設工事
6	沢共同墓地遺跡	貝塚市沢 899	墓地造成工事
7	加治・神前・畠中遺跡	貝塚市畠中 187	造成工事
8	仮称 今池遺跡	貝塚市畠中 1 - 831	体育館建設工事
9	澱池遺跡	貝塚市沢 611	分譲住宅建設工事



1. 堀遺跡
2. 泉州麻生塩壺出土地
3. 貝塚寺内町
4. 長樂寺跡
5. 加治・神前・畠中遺跡
6. 新井・鳥羽遺跡
7. 石才遺跡
8. 橋本遺跡
9. 新井ノ池遺跡
10. 沢共同墓地遺跡
11. 沢城跡
12. 沢海岸北遺跡
13. 沢海岸遺跡
14. 廃明樂寺跡
15. 澗池遺跡
16. 窪田廢寺跡
17. 丸山古墳
18. 地藏堂廢寺跡
19. 積善寺城跡
20. 下新出遺跡
21. 河池遺跡

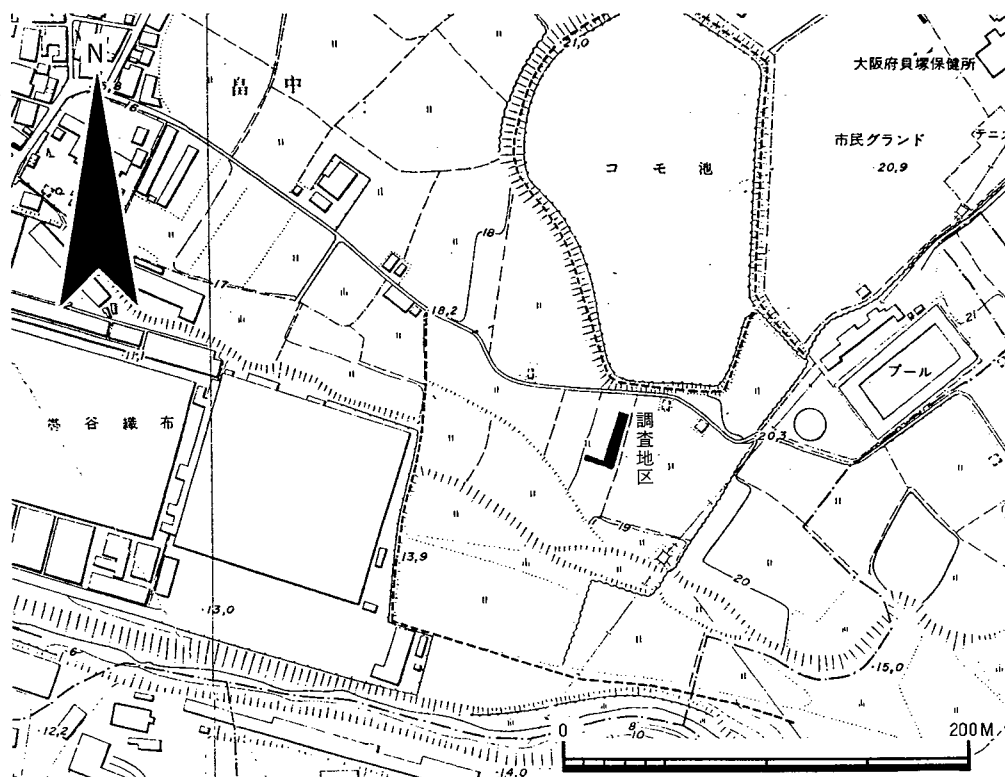
貝塚市遺跡分布図

第一章 加治・神前・畠中遺跡の調査

第一節 位置と環境

本調査区は貝塚市畠中2-103番地に位置し、水田耕作地となっていたが、土地所有者によって個人住宅が建設されることになったため建設工事に先立って発掘調査を実施したものである。調査面積は約 600 m²の敷地のうち約 150 m²を発掘調査した。

調査地は貝塚市役所南西側約 300 m に位置し、広範囲におよぶ加治・神前・畠中遺跡内の南東部の一角にあたる。北はコモ池に近接し、南側約 100 m には近木川が西流しており、



第1図 調査位置図

周囲にはまだかなりの水田耕作地が残る地域である。また、本調査区は近木川右岸の河岸段丘最上段部に位置しているため調査区のすぐ南側は比高差約 3 m のガケ状となっている。

加治・神前・畠中遺跡は弥生～室町時代にかけての遺物散布地として周知している複合遺跡であるが、過去における発掘調査の件数も少なく、遺跡の性格等についてはあまり知

られていなかった。このような中で当遺跡地内をほぼ縦断する都市計画道路貝塚中央線が国道26号線および第二阪和国道をへて泉州山手線・大阪外環状線を結ぶため計画され、大阪府教育委員会による数次にわたる当遺跡内の試掘調査および発掘調査が行なわれた。調査の結果、各時代にわたる遺構・遺物を検出し、特に昭和56年度の大阪府の調査では古墳時代および平安・鎌倉・室町時代にかけての遺構を検出し、各時代の集落のあり方がかなり明らかになってきたところである。本調査区はその貝塚中央線のすぐ南側にあたり、昭和56年度の大阪府の調査結果から古墳時代の遺構の存在が予想しうる地区である。

第二節 遺 構

調査区の設定はトレンチ調査の方法をとり、まず敷地南端に幅約1.5 m、長さ約13.5 mのトレンチを東西方向に設定し、さらに幅約5 m、長さ約21 mのトレンチを南北方向に設定し、機械掘削により遺構検出を行った。遺構検出面までの基本土層は現状が水田耕作地となっているため約0.3 mの耕作土下約0.05 mの厚味で床土を検出し、以下部分的にはあるが淡灰黄色土の中世耕作土が0.05～0.10 mほど堆積していた。以下、暗茶褐色土遺構検出面に達する。

遺構は第2図に示すように東西トレンチ内ではほとんど検出されなかったが、南北トレンチで溝状遺構1条、掘立柱建物2棟、柵列状遺構1条、その他性格不明のピット等を検出した。以下、個々の検出遺構についてその概要を記することにする。

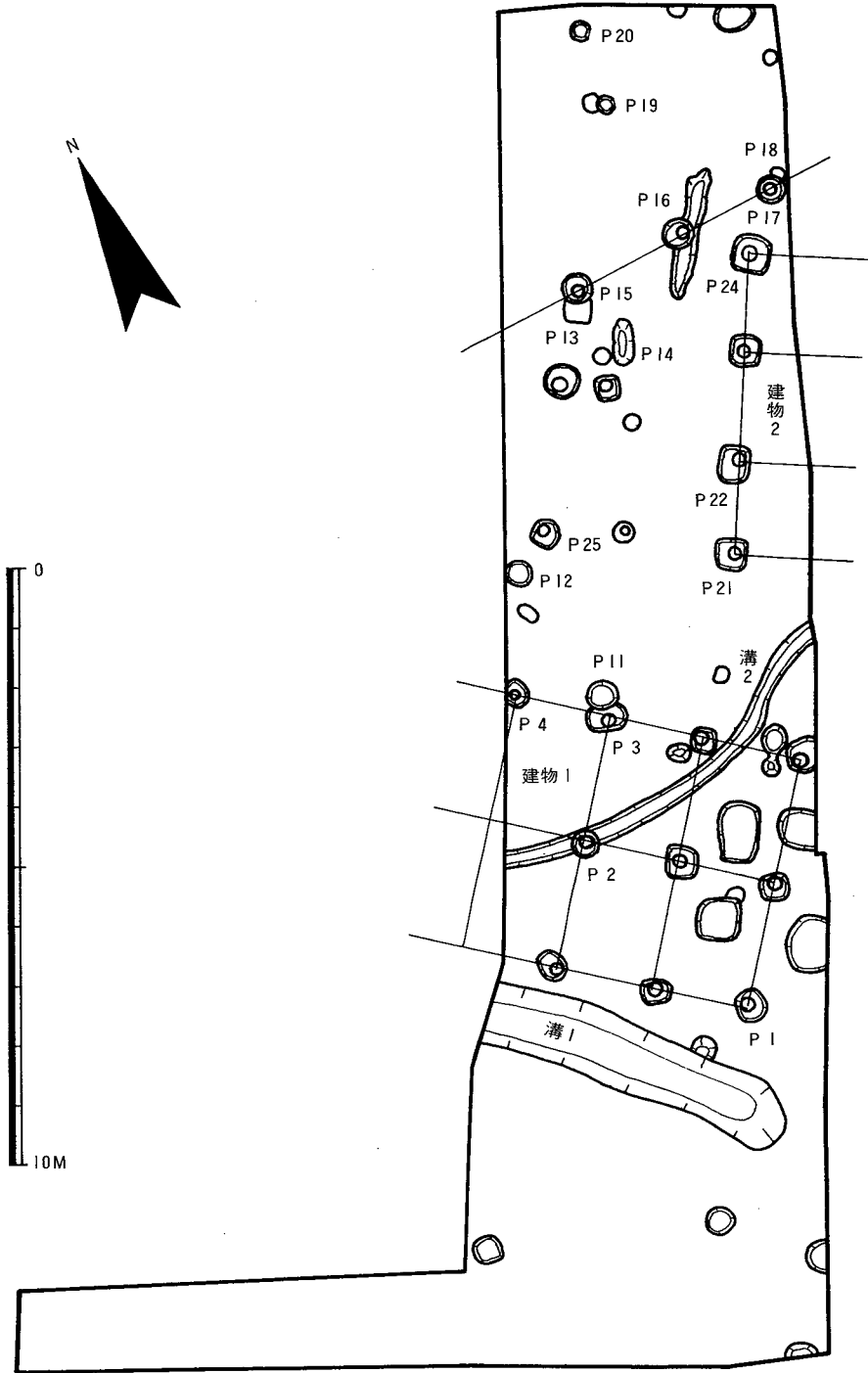
建 物 1

南北トレンチの南側部分で検出したものである。掘立柱式の総柱建物で規模については一部調査外にのびるため明確ではないが、南北軸線をN-37°-Eに置き、南北二間(2.1×2.1 m)、東西で三間(1.6×1.6×1.6 m)を測り、あるいはそれ以上となる。確認の総全長は南北約4.2 m、東西約4.8 mである。

柱穴掘り方は円形あるいは楕円形を呈し径0.4～0.6 mを測り、柱あたりは明確ではないが直径0.13～0.15 mを測り得た。建物1の成立年代としてはやや不明瞭ではあるが、柱穴内より古墳時代後期かと考えられる須恵器杯片・土師器片が極く微量出土している。

建 物 2

建物1の北側約3 mの位置で検出した掘立柱式の建物である。南北軸線をN-27°-Eに置き南北三間(1.6×1.8×1.6 m)で総全長約5.0 mを測る。東西方向へは調査区域外へのびると思われるその全体規模についてはまったく不明である。



第2図 遺構実測図

柱穴掘り方はやや楕円形を呈する方形で一辺0.5～0.6 mを測り、柱あたりは0.15～0.25 mを測る。成立年代としては柱穴内よりの出土遺物が無く不明である。

柵列 1

建物2の北側に近接して所在しほぼ東西方向に二間(2.0×1.7 m)分を検出しているが、さらに東方および西方向にのびるものと思われる。

柱穴掘り方はほぼ円形を呈し直径約0.4 mを測り、柱あたりの規模については約0.1 m前後と思われるがやや不明瞭である。時期的には柱穴内よりそれぞれ平安時代前半ごろと考えられる黒色土器片を若干検出している。

溝 1

建物1の南側東西柱列に0.5～1.0 mの間隔を置いて若干蛇行するもののほぼ建物1に平行して走る溝である。規模は幅約1.0～1.2 m、深さ約0.1～0.2 mを測る。長さは建物1の東側でとぎれ西側は調査区域外へのびていくが、確認全長約5.5 mを測る。溝内断面形はU字形を呈している。時期的には溝内より若干の土師器片が出土しているが明確にし得るものではない。ただ、建物1に平行さみに取り付くことや溝内埋土と建物1の柱穴内埋土が類似することからさほど時期差のないものと考えられ、あるいは建物1に付随する施設かとも考えられる。

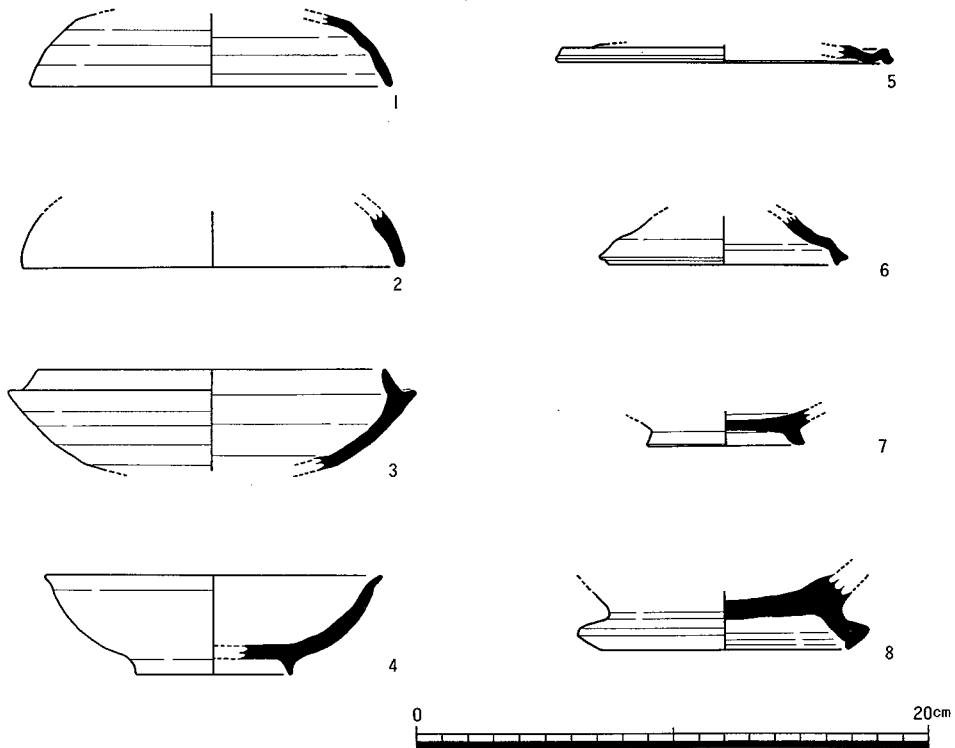
その他、ピット状遺構等を溝1の南側や建物2の西側で検出しているが性格等についてはまったく不明確なものである。

第三節 遺物

今回の調査で出土した遺物は一部の土器を除いては遺構に伴うものではなく、また総出土量としても小破片で極めて微量であるため検出遺構等の絶対年代を規定しうるには不十分な結果であるといわざるを得ない。

今回報告しているのは第3図に示した実測可能な土器片8点のみであり、以下若干の遺物説明を行うことにする。

土器番号1・2は須恵器杯蓋であり、建物1のピット3内および耕作土内より出土。両者ともに口縁部のみの小破片であり、天井部は欠損する。復原口径はそれぞれ14.2・15.0 cmを測り、形態的にはそれぞれほぼ同様の形態を呈するが口縁端部については2がやや丸味をもつ のに対し、1はやや鋭く仕上げられている。調整は内外面ともに横ナデ調整を施す。焼成は良好で黒灰色および灰黄色を呈している。



第3図 遺物実測図

土器番号3は須恵器杯身であり、耕作土内より出土。復原口径13.6cm、最大径16.0cmを測る。たちあがり部はやや内傾ぎみにたちあがり受部はやや傾め上方にのびる。調整は内外面ともに横ナデ調整を施し、外面底部に回転ヘラ削り調整を施す。また、外面には自然釉が認められる。焼成は良好で淡青灰色を呈している。

土器番号4は黒色土器碗であり、柵列1のピット15内よりの出土である。復原口径13.2cm、器高3.9cmを測る。体部は丸味を帯びてたちあがり、口縁端部は薄くやや外方向に広がり丸くおさめられている。内面は横方向に丁寧なヘラ削りが施され、外面も削りを施したのち横ナデ調整を行い、口縁端部近くでややきつい横ナデを施している。高台は張り付け高台であり復原径は6.2cm、高台高は0.6cmを測る。焼成は良好であり胎土も若干の砂粒を含むもののかかなり良質の胎土である。色調は内面黒色を呈し、外面は淡黄褐色を呈している。

土器番号5は須恵器杯蓋であるが宝珠つまみを有するものと思われる。耕作土内より出土。復原口径13.2cmを測る。調整は天井部に一部不定方向のヘラ削り調整痕が認められる

が、他は横ナデ調整である。焼成は良好で暗青灰色を呈している。

土器番号6については須恵器片ではあるが器形的には不明な点が多く、高杯脚部となるものなのか蓋状の器形を有するか不明である。耕作土内より出土。復原径9.8cmを測る。調整は内外面ともに横ナデ調整を施し、焼成はやや不良であるが良質の胎土である。色調は青灰色を呈している。

土器番号7は緑釉を内外面に施した須恵質高台付杯の底部であり、耕作土内より出土。復原高台径6.2cm、高台高0.6cmを測る。高台は張り付け高台で断面台形状を呈し外方向に張り出す。調査は内外面ともに丁寧な横ナデ調整を施している。底部は糸切りの痕跡を残す。焼成はやや良であり良質の胎土を有している。調査は断面淡青灰色を呈し、淡緑色の釉が内外面に一部剥離しているものの全面に施されている。

土器番号8は須恵器の高台である。器形は台付壺あるいは台付長頸壺となるものと思われる。ピット20内より出土。高台径11.5cm、高台高1.5cmを測りやや厚味をもつ断面である。高台は張り付け高台で外方向にかなり張り出している。調整は内面底部に回転の削りを施し外面はナデ調整である。焼成は良好で淡青灰色を呈している。

第四節 ま と め

今回の調査は個人住宅建設にかかる発掘調査ということもあり敷地面積の広さに比べ調査区域がかなり制約を受けた発掘調査であった。そのため、検出した遺構についてもその広がり方を充分把握できたとはけっしていえないものであり、出土遺物も極めて微量であることから検出遺構の絶対年代を規定しうるには不十分な結果となってしまった。

このような調査成果の中であえて検出遺構の時期を想定するとすれば出土遺物より古墳時代後期以降および黒色土器・緑釉土器等の出土から平安時代とに大別が可能かと考えられる。平安時代の遺構としては黒色土器を有する柵列1があげられ、また柵列1内のピットとピット20との埋土が両者とも灰黄色砂質土であり少なくとも土器番号4の黒色土器および土器番号8の須恵器高台片とは同時期の可能性を有している。その他建物1については出土遺物もほとんど無いものの規模・形態および周辺出土土器などから古墳時代後期以降かと考えられる。建物2については出土遺物も無くまったく不明であるが、建物1とは建物の方向性および柱穴掘り方の形態を異にしていることから若干の時期的先後関係を有するものと考えられる。

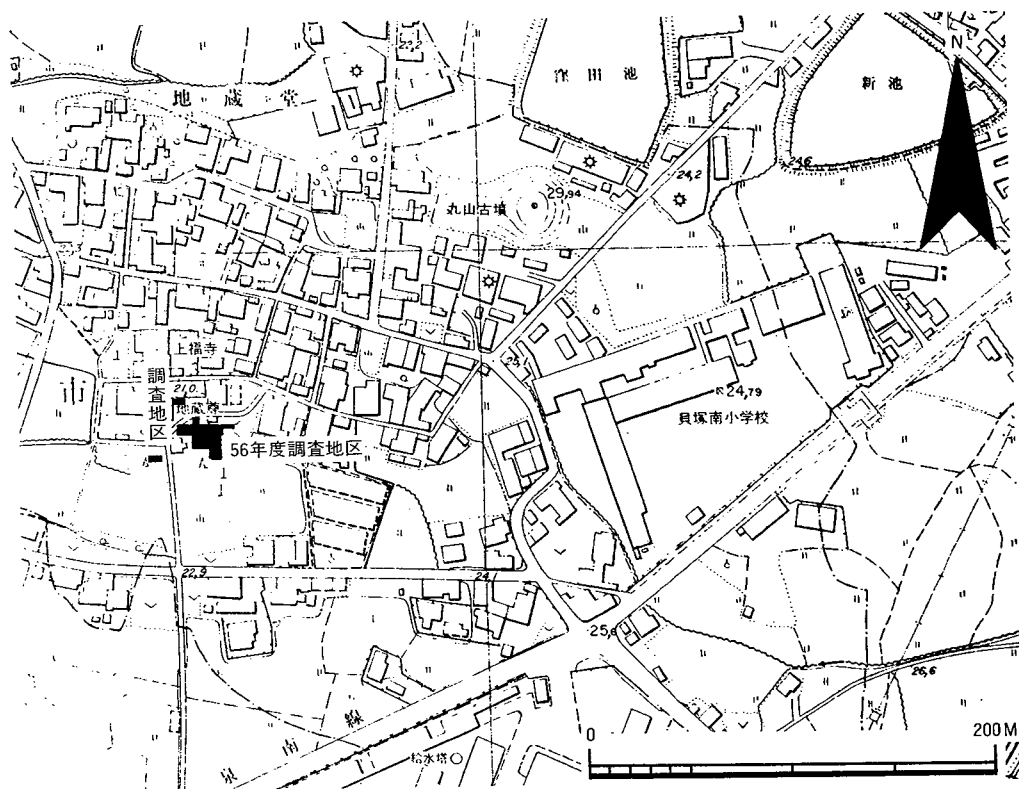
第二章 地蔵堂廃寺跡の調査

第一節 位置と環境

貝塚市地蔵堂 237 番地に位置する正福寺境内が今回調査を実施した地区である。

当地域は平安時代の屋瓦が出土する埋蔵文化財包蔵地の中心地区であり地蔵堂廃寺跡として大阪府遺跡地図にマークされているところである。

このような中、調査に至る経過としてかねてより正福寺敷地内に所在する大師堂が老朽化してきていることから建て替え工事の計画がなされていたが、昭和56年度において大師



第4図 調査位置図

堂建て替え予定地である大師堂東側の約 300 m²の空間地の発掘調査を実施してきた。その調査の結果からかなり攪乱・削平は受けているものの平安時代にまで遡るものと思われる一辺約9 mを測る地山削り出しの建物基壇跡を検出した。そのため、遺構保護および一部所有者による諸事情により新たな大師堂建築予定地を設けることとなり本堂東側に平行し

て建設する運びとなった。

今回の発掘調査は第5図に示すようにF区として現本堂東側に南北幅約2m、東西長約4mのトレンチを設定し調査を開始した。また、合わせて鐘楼跡東側にも試掘トレンチG区を設定した。

正福寺の所在地は国鉄阪和線と泉橋本駅西方約500mの府道大阪和泉南線沿いから約100mばかり北方にはいった集落内の海拔約21mに位置する。山号は宝幢山惣持院と号しほぼ南面する三間四面の本堂に勝軍地藏菩薩像・大日如来像を本尊としている。現在の建物は本堂のほか庫裡および大師堂があるが、もとはそれらとともに大日堂が敷地境内東端部にあったものの明治年間に取り壊され、鐘楼も本堂南西部に所在するが室戸台風によって倒壊し現在は切石積みの基壇部分が残存するのみである。

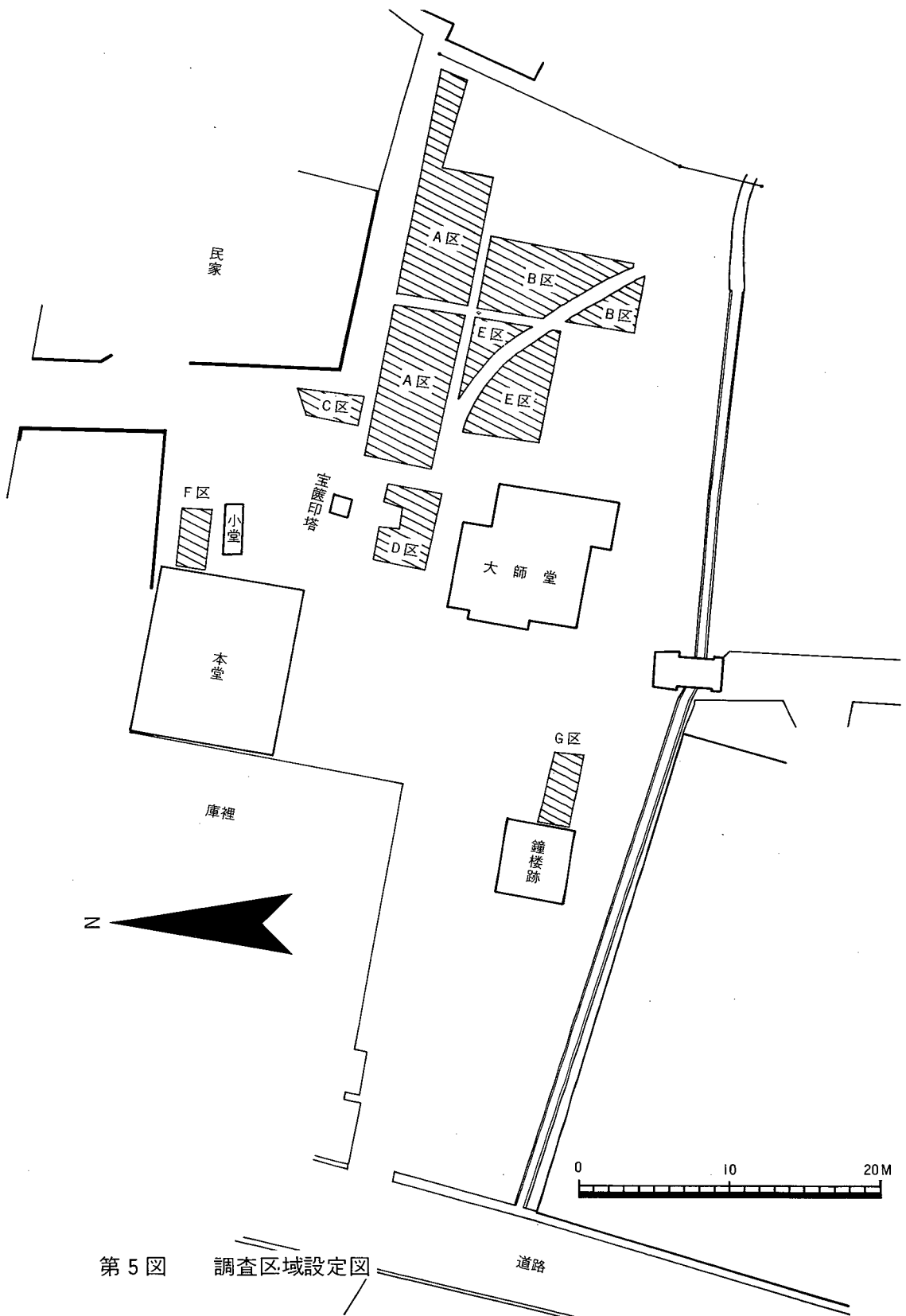
寺歴については元禄13(1700)年の序文をもつ泉州志および寛政年間(1789~1801)の和泉国寺社境内帳に若干の記載がある。それらによればもとは勝軍寺と号し宝塔涅槃堂・薬師堂・鐘楼・浴室・四門および六坊等を備えた寺院とされているが、永禄年中(1558~1570)に三好氏の兵火にかかり焼失したとなっている。その後、寛文元(1661)年に再興され、その時勝軍寺の寺号を正福寺と改名している。

周辺遺跡としては北東約150mに貝塚市にとっては唯一の古墳時代中期かと考えられる前方後円墳である丸山古墳が前方部を西方に向き所在しており、円筒埴輪片が採集されたといわれる下新出遺跡が南東方約500mの国鉄線沿いに位置している。西方には第二阪和国道を狭みや離れているが窪田廃寺跡等の遺跡がある。

第二節 遺 構

調査区は第5図に示すように建物基壇跡を検出したA区~E区および今回調査を実施した本堂東側のF区、鐘楼東側のG区である。

基本的層位については各調査区において堆積土層厚の変化および検出遺構の堆積土等の状況から若干個々における差異は認められるが厚さ0.05~0.2mの第1層表土層、以下第2層淡黄褐色土層、第3層茶褐色焼土層および第4層黄色土層となり最終明黄褐色地山面に達する。それぞれの堆積土の厚さも調査区域によって異なるが概ね第2層は0.2~0.45m、第3層は0.05~0.2mおよび第4層は0.05~0.3mである。その他部分的ではあるが第2層淡黄褐色土層の上下層にも薄く別の層序も認めることができる。ただ、各土層を基本的に分けるにあたっては遺構の検出状況および出土遺物の時期的検討をも含め、第3層茶褐色焼土層を中

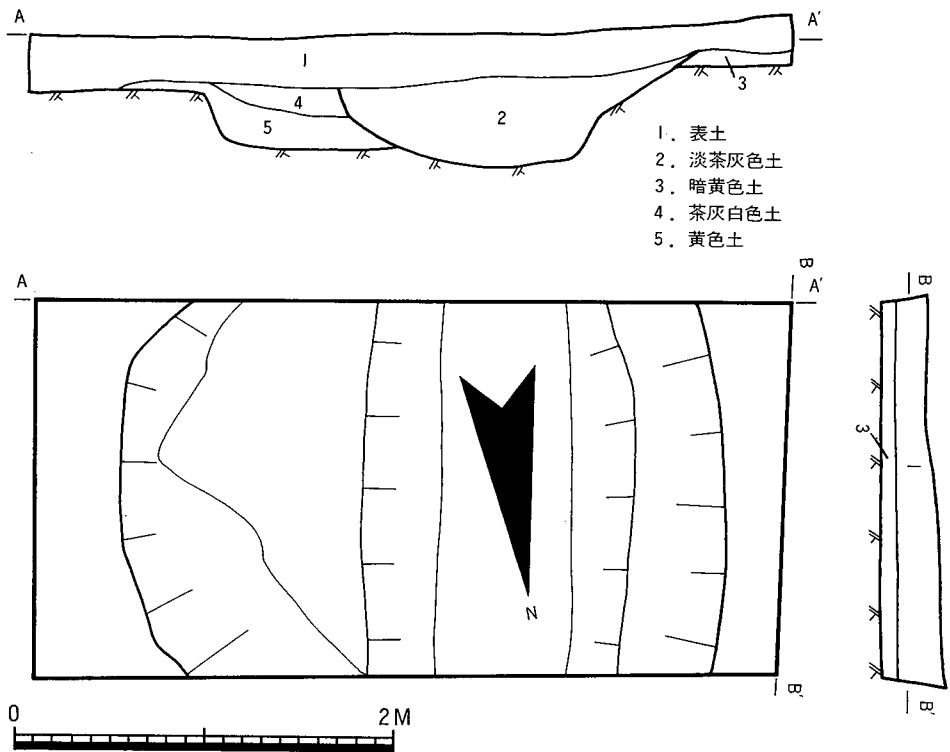


第5図 調査区域設定図

心として上層および下層に分けることが可能であり、時期的には出土屋瓦から第3層茶褐色焼土上層を江戸時代以降および下層をそれ以前と考えられる。以下、検出遺構についてその概要を記すことにする。

過去の調査結果から大師堂東側の調査区（A区～E区）で検出された遺構は削平等による数多くの攪乱を受けてはいたが、調査区域ほぼ中央部で地山削り出しの建物基壇跡および性格不明の土壇状遺構等である。

建物基壇跡は東側雨落ち溝部分が新しい時期の削平によって大きく削り取られているが、基壇軸線をほぼ磁北方向に向け復原すると一辺約9mの正方形を呈するものである。残存基壇高は0.3～0.5mで基壇上面は大きく削平を受けており、礎石痕あるいは柱穴等の建

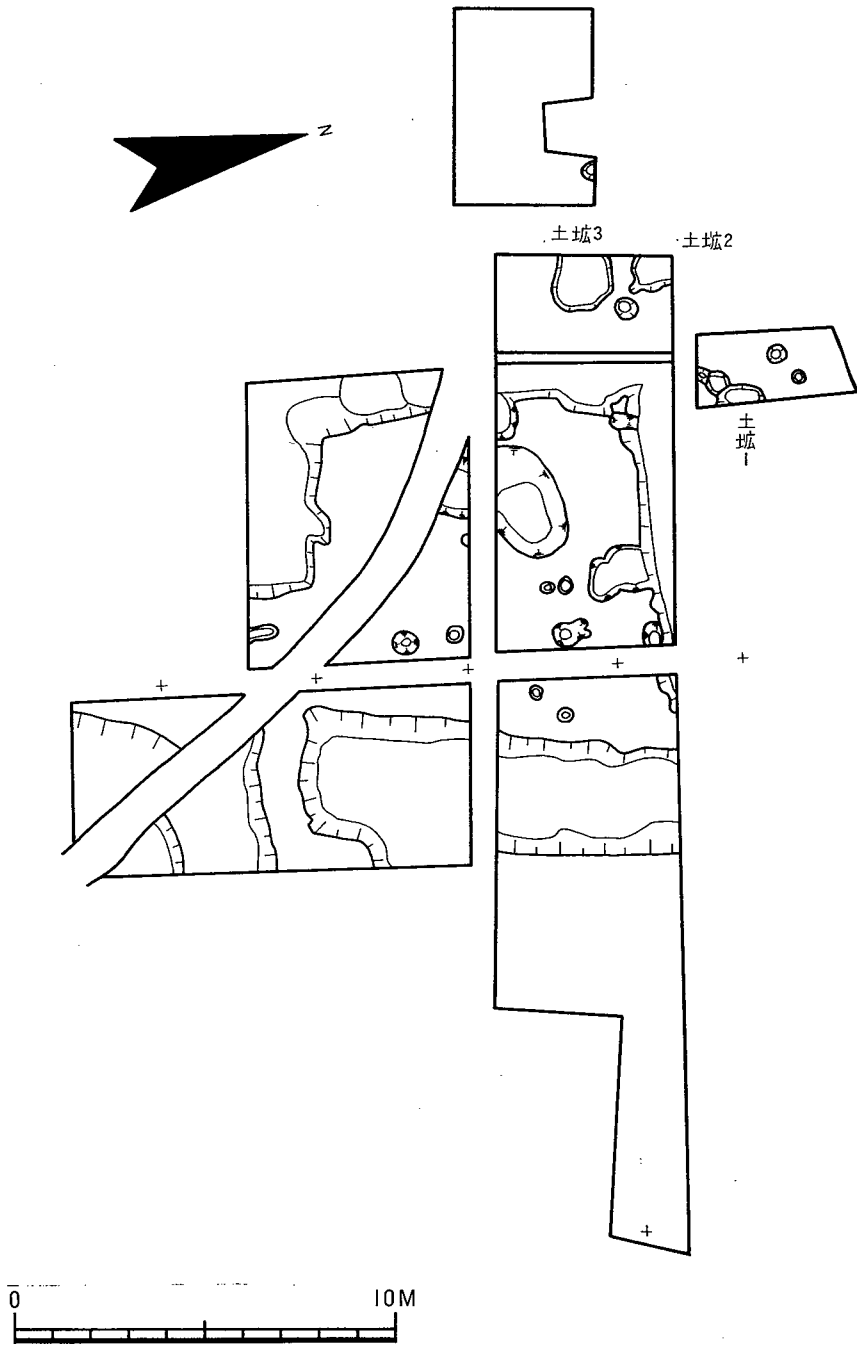


第6図 F区遺構実測図

物跡はまったく認められなかった。

基壇南東隅にはそれぞれ南方にのびる残存高0.4m、幅2～2.5mの地山の高まりと東方へ残存高約0.3m、幅1.0～1.2mの高まりものびている。基壇北東隅にも同様に北壁セクションに接して幅1mばかりの高まりが残存し北壁内にのびているようである。

これらは現状においては残存基壇高と同レベルである。ただ、基壇削平以前において基



第7図 A～E区遺構実測図

壇高と同レベルを有していたかどうかは不明であるが、基壇に取り付く通路的役割をもつものではないかと思われる。

基壇西方および北西部においては径1.2～1.7 m、深さ0.10～0.35 mのやや不定形な円形土壇を検出している。土壇1については第3層茶褐色焼土を埋土とするもので、土壇2、3は第4層黄色土を埋土とするものであり時期的差異が認められる。

土壇状遺構の性格については相互間に関連性をもつものでもなく現在のところまったく不明である。

今回実施した本堂東側のF区の調査結果については現表土下約0.2～0.3 mで本堂の基壇および雨落ち溝を検出した。共壇は検出部分上部で約0.1 mの暗黄色盛土が残存するが、以下は明黄褐色地山土となり約40°の傾斜で雨落ち溝となる。また断面観察から雨落ち溝は一度改修を受けており、改修後の雨落ち溝規模は幅約1.4 m、基壇上面よりの深さ約0.6 mを測り得た。

G区については約0.3 mの現表土を除去したのち遺構検出を行ったが、全面にわたり攪乱を受けていたため遺構の検出までには至っていない。

第三節 遺 物

出土遺物については先回の大師堂東側調査区（A区～E区）内において多量の屋瓦等を検出しており、今回の本堂東側調査区（F区）および鐘楼跡東側調査区（G区）内で出土した屋瓦等と合わせ遺物観察表とともにその概略を記すことにする。

出土遺物の大半は丸瓦片・平瓦片であり、その出土量は遺物収納箱約250箱分が出土している。その他、軒丸瓦・軒平瓦等についても極く小破片をも含めて約300点が出土し、種別的には近現在の軒丸瓦・軒平瓦等をも合わせて軒丸瓦27種、軒平瓦24種と多種にわたっている。また、先回の調査における出土屋瓦の中でA区黄色土内およびSD-1内よりそれぞれ軒丸瓦の丸瓦部に縦書きで「正応三年」銘（1290年）および「永享十年」銘（1438年）をもつ軒丸瓦も出土している。永享十年銘をもつ屋瓦については明確ではないが、正応三年銘をもつ屋瓦はNM-9と同範関係を有するもので出土屋瓦の実年代を示す好資料といえる。

これら出土屋瓦の時期については「正応三年」という実年代をもつNM-9をもとに出土屋瓦・遺構等と考え合わせ軒丸瓦についてはNM-1～3を、軒平瓦についてはNH-1～7を平安時代末期、以下整理の都合上大づかみ的にはあるが鎌倉時代から室町時代に

比定されるものである。また、NM-22~25・27、NH-17~23については江戸時代以降近現代の屋瓦と思われる。

第四節 ま と め

調査の結果から検出遺構としては大師堂東側調査区（A区～E区）で後世の攪乱を多く受けてはいるが、一辺約9mを測りほぼ正方形を呈する地山削り出し建物基壇跡、本堂東側調査区（F区）において現本堂の基壇の一部および雨落ち溝と現本堂以前の雨落ち溝を検出している。

大師堂東側で検出した建物基壇の建設時期については基壇周辺より検出される茶褐色焼土層をほぼ永禄（1558～1570）年間と考えることから、それ以前の築造であることは間違いなく、また地山削り出し基壇という構造上の性格から寺院創建期にまで遡るものと思われる、ほぼ平安時代のもと考えられる。建造物については基壇規模が一辺約9mを測る正方形であることから塔跡と考えられる。なお、廃絶時期については先きに触れた泉州志において塔跡の記載が無いことから既に18世紀には廃絶しており、寛文元（1661）年の寺院再興時には当基壇上には建造物は建築されず、永禄年間に焼失した状態のままになっていたものと思われる。

本堂東側F区で検出した基壇の一部および雨落ち溝については現本堂再興寺に旧基壇を利用して再興されたもので素掘りの雨落ち溝もその時再度施設されている。また、土層断面の観察から旧基壇については現本堂よりやや規模が大きいものと思われる。旧基壇の築造期については先述の建物基壇と同様地山削り出しの基壇であることから両者は同時期のもと考えられる。

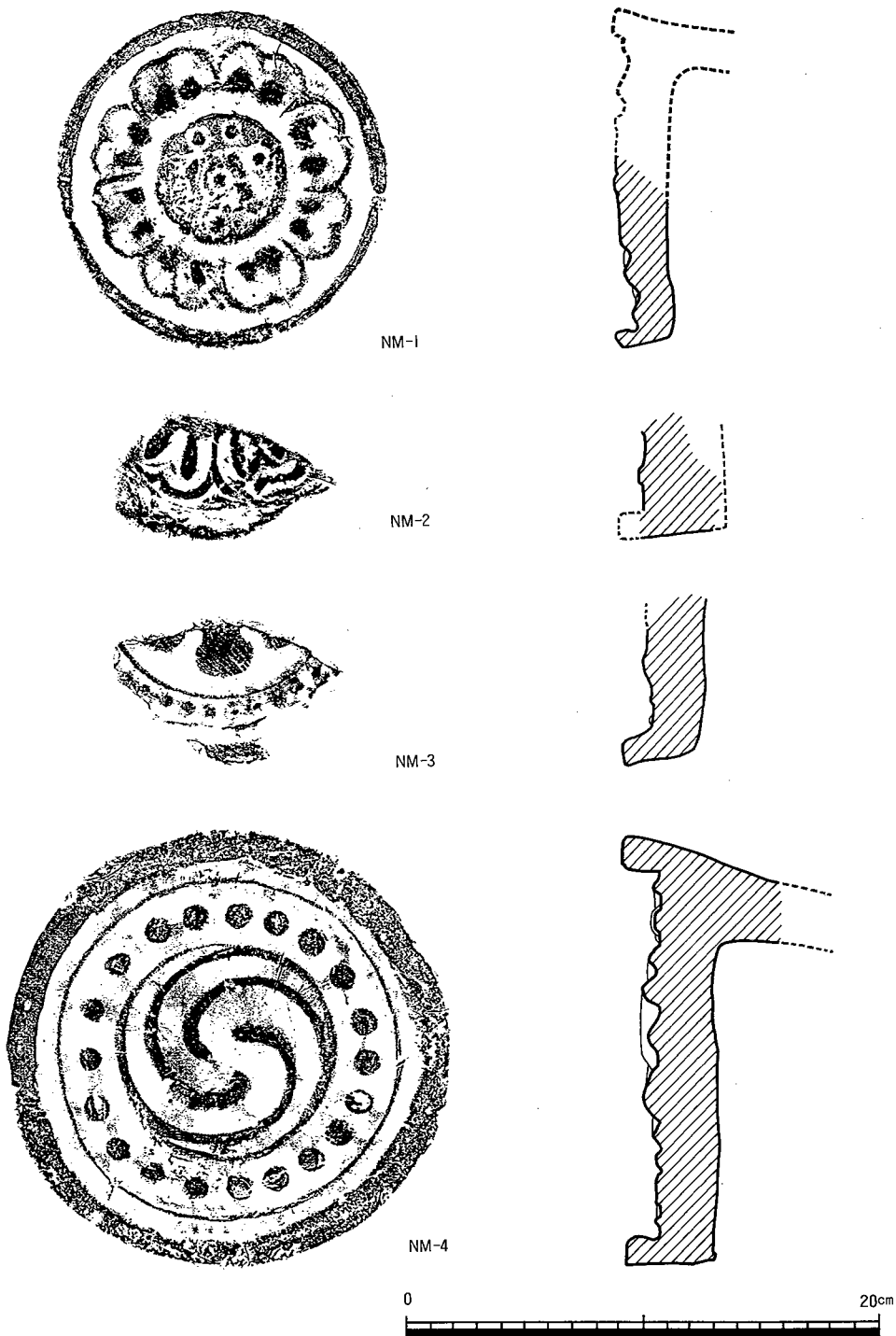
今回の調査結果から創建時における当寺院の遺構の残存状況は極めて良好と考えられ、平安時代創建にかかる伽藍配置等が明確に捉えられる遺跡と思われる。また、出土屋瓦についても今後十分な整理・検討を加えることにより、当時院の歴史上希薄であった鎌倉時代以前の歴史を実年代とともに明確にされることもあながち不可能ではないものと思われ、今回出土の年号銘をもつ屋瓦は標識遺物となるものである。

遺物番号	出土地区	瓦 当 部										丸 瓦 部										瓦当部接合の手法	胎土備考						
		径	周縁幅	文様区径	内区径	外区幅	中房径	珠文数	蓮子数	弁数	四文の向き	成形		調 整					胎土の色調	焼成	色調								
												凹	面	凸	凸	凹	側	瓦						外	内	厚	玉	丸	
布目	糸数	20	×20	経	緯	印	面	面	面	面	裏	径	径	厚	縁	縁	瓦	胎土の色調	焼成	色調									
NM-1	A区SD-3 黄色土	149	7.5	123	123	—	58	8	1+7	8	—	—	—	—	—	—	ナデ	—	—	22	—	—	黄褐色	やや軟	黄褐色	中房に1+7の蓮子をもつ(雑) 周縁は極端にせまい、瓦当がやや外変すると思われる。砂粒を含む			
NM-2	A区SD-1	164	11	142	142	—	—	—	—	10	—	—	—	—	—	—	ヘラ削り のあとナデ	—	—	20	—	—	黄褐色	良	淡黒 灰色	複弁蓮花文鏡瓦小礫含む。			
NM-3	A区SD-1	152	10	117	93	12	—	30	—	5	—	—	—	—	—	ナデ	—	—	—	—	—	—	黄褐色	良	淡黄 灰色	細かい砂粒及び10ミリ大の小礫を含む。			
NM-4	D区淡黄褐色土下層	182	14	157	88	27	—	20	—	—	左	—	—	—	—	ヘラ	ヘラ	指圧 ヘラナデ	177	132	24	—	—	淡褐色 白色	やや 堅緻	明灰色 淡灰色 淡緑灰色	外縁部にヘラ削り文様は比較的肉厚 外圏線をもつ瓦当裏面は横のヘラ削りあと、丸瓦との接合の際の指ナデ痕を呈す。巴の尾は長く、次の尾に接している、巴頭は肉厚である。珠文間隔は比較的密		
NM-5	A区表土	176	11	154	120	17	—	—	—	—	左	18	18	—	ヘラス リケシ	布	—	ヘラ	—	—	20	—	—	淡褐色	良	淡褐色	瓦当裏面上部に溝をつくり丸瓦をはさんで接合する円弧状接合線 珠文が細かく密に配される。内圏線・外圏線をもつ巴は肉厚で尾は長く続く。		
NM-6	A区SD-1	164	13	—	87	18.5	—	—	—	—	左	—	—	—	—	—	—	ナデ	—	—	—	—	—	黄褐色	良	灰褐色	外縁部にヘラ 内圏線・外圏線をもつ内区のはまろやか巴頭部にキズがある。		
NM-7	A区SD-1	160	16	128	100	14	—	24	—	—	左	—	—	—	—	—	ヘラ 指圧	—	—	—	—	—	—	白灰色	堅	灰褐色 黒灰色	外縁部は横ヘラ 内圏線をもつ巴は肉厚で、尾は細く長く続く。珠文は小さくやや密に配す。		
NM-8	B区SD-1	146	8	125	89	18	—	—	—	—	左	—	—	—	—	—	ヘラ ナデ	—	—	—	—	—	—	灰褐色	堅	褐色	外縁部はヘラのあとナデ 周縁幅が比較的狭い、内区は肉厚斑は密に配し、ややつぶれがみ、巴の尾部に糸状痕が何本もくっきり残る。		
NM-9	A区基壇 瓦落ち	158	16	124	92	16	—	21	—	—	右	—	—	—	ヘラ	布 糸切り	ヘラ	ヘラ ナデ	151	124	19	—	—	—	灰白色	やや 堅緻	白灰色	瓦裏面上部に溝をつけ丸瓦をはさんで接合する。 円弧状接合線瓦当面に范型の水目痕残存 小石、砂粒、白色粒を比較的多く含む内圏線をもつ、尾は長く次の尾につながる。 「正応三年」銘軒丸瓦と同范	
NM-10	A区SD-1	174	20	130	99	14	—	20	—	—	右	30	14	—	ヘラス リケシ	布 糸切り	ヘラ	ヘラ ナデ	164	98	31	—	—	—	褐色	やや 堅緻	黄褐色	瓦当裏面上部に溝をつけ丸瓦をはさんで接合する、円弧状接合線瓦当面全体に凹凸 がひくい、周縁から内区にかけて浅い。 内圏線をもつ尾はひらたく長く続く珠文は比較的小さく配置は粗小礫含む。	
NM-11	A区SD-1	148	17	107	73	15	—	19	—	—	右	—	—	—	ヘラス リケシ	布 糸切り	ヘラ	ナデ	128	86	23	—	—	—	灰白色	良	褐色	瓦当裏面上部に溝をつくり丸瓦をはさんで接合する。 ザラついている巴の3つの頭はくっつきぎみ肉厚で長く続く内圏線をもつ 微砂粒含む。	
NM-12	B区茶褐色 焼土	142	15	112	81	15.5	—	20	—	—	右	—	—	—	—	—	ヘラ ナデ	—	—	—	—	—	—	白灰色	良	淡里 灰色	内圏線をもつ瓦当面ザラつく内区は肉厚巴の尾は長く続く瓦当面中心部に范型 がのこる。 外縁部は横ヘラ		
NM-13	E区淡黄褐色土	175	16	120	81	21.5	—	18	—	—	左	—	—	—	ヘラス リケシ	—	—	—	—	115	25	—	—	—	灰白色	やや軟	ハクリ のため 淡褐色	瓦当裏面上部に溝をつけ、丸瓦をはさんで接合する。 巴の頭は小さく尾長で細く大きくまわる。内区は深くは入りこみ、18ミリ下がる。 小礫、雲母含む。	
NM-14	C区黄色土	135	15	101	69	17	—	17	—	—	左	16	14	—	ヘラス リケシ	布 糸切り	ヘラ ナデ	ヘラ ナデ	130	85	23	—	—	—	暗灰 褐色	堅	淡青 灰色	外縁部にヘラ 内区文様は、全体に凹凸が少ない 内圏線をもつ巴は頭と尾のくびれがなく、だんだん細く内圏線に続くザラつく	
NM-15	A区SD-1	150	19	105	75	15	—	23	—	—	右	—	—	—	ヘラ	布	面取り	ヘラ	138	82	22	—	—	—	白褐色	良	淡黒 灰色	円弧状接合線 内圏線をもつ巴の尾は細く長く続く連珠は肉薄で23コがやや密に配される。 砂粒を含む	
NM-16	A区SK-1	147	18	110	84	14	—	25	—	—	左	—	—	—	—	—	ヘラ ナデ	141	96	—	—	—	—	明灰色	堅緻	明灰色 淡青灰色	瓦当裏面上部に溝をつけ丸瓦をはさんで接合する。周縁から内区に下がる ところに面取りのようなものがある。 若干、砂粒・白色粒を含む、綱 巴の頭と尾のくびれがある。		
NM-17	A区西壁サ ブトレ内	140	15	104	70	16	—	11	—	—	左	—	—	—	ヘラス リケシ	ヘラ	面取り ヘラ	ヘラ ナデ	133	99	13	—	—	—	白灰色	良	淡黒 灰色	円弧状接合線外縁部にヘラ 砂粒含む。巴は頭と尾のくびれがはっきりしているが、頭は小さく尾もややお おまわりかけんである。珠文は小さく配置は粗	
NM-18	A区SK-1	142	19	103	71	16	—	12	—	—	左	—	—	—	ヘラス リケシ	—	—	ナデ	132	93	15	—	—	—	淡黄 褐色	良	淡褐 灰色	内圏線をもつ巴の尾は細く長く次の尾に続かない、珠文は粗の配置巴の頭と尾 のくびれあり。	
NM-19	A区基壇盛 土内	151	15	120	90	15	—	16	—	—	左	—	—	—	—	—	ヘラ	—	—	—	—	—	—	—	黄褐色	良	淡黒 灰色	外縁部にヘラ 周縁から内区にかけて、面取りではないようだが丸みをおびて下がっている。 瓦当面・裏面とも砂粒の跡あり、巴は頭と尾のくびれがはっきりしており、尾 は次の巴の半分の長さまで続く。	
NM-20	B区表土	128	19	90	50	20	—	15	—	—	左	—	—	—	—	—	ヘラ ナデ	131	—	—	—	—	—	—	淡赤 褐色	良	褐色	瓦当裏面上部に溝をつくり接合する。接合部に幅2の細い線が3本みられる。 にふい光沢がある。巴は頭と尾のくびれがはっきりしている。珠文は大きく密に配す。	
NM-21	B区SD-1	124	17	89	58	17	—	16	—	—	左	—	—	—	—	—	ヘラ ナデ	115	88	21	—	—	—	—	淡褐 灰色	良	暗褐 灰色	瓦当裏面上部に溝をつけ、丸瓦をはさんで接合する。円弧状接合線周縁から内 区に3下がる。 内区は肉薄珠文は小さく粗に並ぶ巴頭はひらたく大きい。急に尾が細くなる。 周縁部に范型のキズがのこる。	
NM-22	A区基壇盛 土内	140	22	90	55	17	—	16	—	—	右	—	—	—	—	—	ナデ ヘラ	—	—	—	—	—	—	—	褐色	良	銀灰色	外縁部にヘラ 比較的周縁幅が広い。珠文に段がついている大きく密に配す。	
NM-23	E区攪乱地	138	25	85	52	15	—	15	—	—	右	—	—	—	—	—	ヘラ ナデ	137	101	—	—	—	—	—	褐色	良	銀灰色	瓦当裏面上部に溝をつくり丸瓦をはさんで接合する。 円弧状接合線外縁部ヘラのあとナデ 周縁の外縁部に3~6ミリの面取りがある。内区は肉厚瓦当面・裏面とも銀色の 光沢あり、巴の頭と尾のくびれあり	
NM-24	A区表土	113	13	87	62	9	—	25	—	16	—	24	26	—	ヘラス リケシ	布 糸切り	面取り ヘラ	ヘラ ナデ	112	90	18	—	—	—	—	淡褐 灰色	堅緻	淡灰色	円弧状接合線 外縁部ヘラのあとナデ 内圏線をもつ比較的小さい丸瓦珠文は小さく密に配す。 瓦当面ザラつく中房の外に圏線1本その外に16の花弁がとりまく。
NM-25	A区基壇盛 土内	86	10	64	—	—	—	—	—	10	—	—	—	—	ヘラ	ヘラ	面取り ヘラ	ヘラ ナデ	57	40	15	—	—	—	—	褐色	良	銀灰色	比較的小さい瓦道具瓦か？周縁から内区にかけて幅2ミリの面取り、銀色の光沢あり。
NM-26	C区黄色土	145	21	102	102	—	—	12	—	—	—	—	—	—	—	—	ヘラ ナデ	—	—	—	—	—	—	—	淡褐色	良	銀灰色	円弧状接合線、外縁部ヘラのあとナデ 梵字瓦内区に范木の目がたてにはっきりと残る。	
NM-27	A区基壇盛 土内	141	17	103	—	—	—	8	—	—	—	—	—	—	ヘラス リケシ	—	面取り ヘラ	ヘラ ナデ	132	106	14	—	—	—	—	褐色	良	黒銀 灰色	外縁部ヘラのあとナデ 梵字瓦、周縁から内区へ面取り4~5ミリ、そして内区へ2ミリ下がる。

表1 軒丸瓦観察表

遺物番号	出土地区	瓦 当 部											平 瓦 部										胎土の色調	焼成	色調	瓦当部成形の手法	胎土備考			
		上弦幅	弧深	下弦幅	厚	周縁幅	内区厚	内区幅	外区厚	脇幅	内区文様	反転数	珠文数	成形		調 整												厚		
														経	緯	凸面叩	凸面	凹面	広端	狭面	側面	総全長							狭端幅	
NH-1	A区SK-1	—	—	—	36	7.5	両端欠損130	両端欠損130	—	—	均整唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	37	白灰色	硬	瓦当暗灰色 平瓦凹面灰 黄褐色平瓦 凸面黒灰色	瓦当面とその平凡下半分をつくりそして、瓦当面上部（周縁部分も含くめ）を接合する。	4ミリ程度の小石・砂粒を含む無額形式
NH-2	A区SD-1	—	—	—	37	7	21	—	—	均整唐草文	左2右2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22	淡黄灰色	硬	黄灰色 黄褐色	胎土は細かく密、少量の小礫を含む	
NH-3	A区基壇落込内	—	35	—	52	6	21.8	—	4	9	均整唐草文	右4左4	—	1	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	33	淡黄白色 黒色粒混入	硬	暗灰色 やや明灰色	瓦当裏面に平瓦広端部をあて接合	浅めの中顎形式15ミリ程度の砂粒混入
NH-4	A区SD-1	—	—	—	36	3.5	22.5	—	2	—	唐草文	—	—	12	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	35	灰黄色 黒色粒混入	硬	淡灰色	4ミリ程度の砂礫砂粒	
NH-5	D区淡黄褐色	—	—	—	38	5	—	—	3	—	唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄色	普通やや軟	淡黒灰色	瓦当裏面に平瓦広端部をあて接合	6ミリ程度の小石を含む、他に砂粒も混入胎土は細かい
NH-6	B区表土	—	—	—	—	6	—	—	—	—	唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄色	硬	淡黄灰色	瓦当面平瓦部分ともに横にわれているため、上部下部をつくり接合し、また、平瓦広端部をあて接合	胎土は細かく密である。細かい砂粒と少量の小礫無額形式のようである。
NH-7	A区表土	—	—	—	—	5	—	—	3	—	唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄褐色	普通	淡黄灰色	瓦当平瓦の上部をともにつくり、そして瓦当面下部を入れ接合する。	砂粒を含む4ミリ程度の小礫あり、無額式略額に近い。
NH-8	D区淡黄褐色土	305	47	312	62	10	284	284	6	10	連珠文	—	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	白黄色	硬	淡黄褐色 淡黄色	8ミリ程度の小礫砂粒混入	
NH-9	A区基壇盛土内	—	—	—	43	10	—	—	—	10	連珠文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18	淡黄褐色	やや硬	淡黄色	2～5ミリ程度の小礫を含む凹面に砂粒付着、瓦当上部（周縁部）・瓦当裏面に圧痕あり。	
NH-10	B区茶褐色焼土	—	—	—	—	11	—	—	—	—	唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄白色	硬	淡黄色	2ミリから4ミリ程度の小礫を含む中心筋のみ残	
NH-11	A区SD-1	263	31	258	54	12	30	233	—	14	均整唐草文	左5右5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	27	淡黄褐色	硬	淡黄色 一部 淡黒灰色	中顎形式のようである。少量の砂粒と白色粒混入	
NH-12	A区SD-1 820210	—	—	—	44	9	21	—	1	—	均整唐草文	左3右3	—	13	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	24	淡黄灰色	硬	淡灰色	瓦当裏面に平瓦をあて、接合	胎土は細かく密、少量の砂粒混入。上部だけに圈線がある。
NH-13	A区SD-1 820219	—	—	—	45	10	20	—	2	12	均整唐草文	左3右3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	白灰色	硬	白灰色	瓦当裏面に平瓦をあて接合。	胎土は細かく密、1ミリ～5ミリ程の小礫混入、凹面上にはざらつきがある。NH-12の范型を彫りなおして作られている。
NH-14	B区茶褐色焼土	254	35	206	51	10	23	215	—	18	均整唐草文	左3右3	—	18	18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	白灰色	硬	暗灰色 凹面 明灰色	脇幅＝正面向って左14ミリ、右23ミリを極端に幅がちがうため平均をとった。少量の砂粒を含む。	
NH-15	B区茶褐色焼土	—	—	—	35	8	21	—	—	29	唐草文	左1右1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	淡黄色	硬	淡黄褐色 (凹面瓦当部)他は 淡灰色	瓦当裏面に平瓦部をあて接合	砂粒を少量含む瓦当裏面に圧痕あり、
NH-16	A区黄色土	250	35	265	50	10	19	215	2	20	均整唐草文	左4右5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	淡黄色	硬	淡灰色	平瓦凹面と瓦当面を共に作り、平瓦の下部（顎の部分）を接合	周縁幅は場所によってバラつきがある。(9ミリ～12ミリ)周縁の脇になるほど幅は広がっていく、文様は中心近くで欠損のためはっきりと反転数が読みとれない。凹面に砂粒のあとがみられる。4ミリ程度の小礫・砂粒混入
NH-17	A区茶褐色焼土	—	—	—	43	10	26	—	—	10	均整唐草文	左4右4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	淡黄褐色	硬	暗灰色 淡黄褐色 黄褐色	布目痕がわずかにみられるが、なでですり消しのため数られない。3ミリ程度の小礫を含む	
NH-18	B区表土 820213	—	—	—	40	11	15	—	—	12	均整唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22	淡黄灰色	硬	淡黄灰色 淡灰色	周縁部をふくむ平瓦凹面と瓦当面と平瓦凸面を接合	3ミリ程度の砂粒混入文様は造りが荒い。
NH-19	A区表土	—	—	—	51	17	12	—	3	10	均整唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22	淡灰白色	硬	瓦当上部凹面 暗灰色凸面 白灰色	瓦当面をつくり周縁をふくむ平瓦凹凸部を接分	胎土細かく密。砂粒少量。2ミリから5ミリの小礫が少量混入
NH-20	A区SD-1	—	—	—	43	7	12	—	3	10	唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25	白灰色	硬いがやや軟	淡白灰色	平瓦部と瓦当面に顎部をはりつける。	胎土は少しもろい。少量の砂粒を含む。
NH-21	B区表土	—	—	—	30	7	12	—	—	—	唐草文	—	—	18	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18	淡黄灰色	硬	暗灰色	平瓦部分と瓦当面を接合	砂粒混入
NH-22	A区SD-1	—	—	—	—	10	10	—	3	—	唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	淡黄白色	硬	暗灰色	瓦当裏面に平瓦部を接合	胎土は細かく密。1～2ミリの小礫混入
NH-23	B区淡黄褐色土	—	—	—	38	8	19	—	—	—	均整唐草文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	黄灰色	硬	暗黒灰色 光沢あり	胎土は細かく密である。3ミリ程度の少礫を含む周縁に「貝瓦亀」の陰刻がある。	

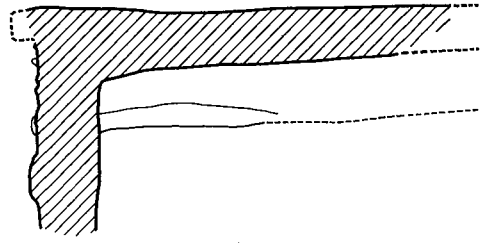
表2 軒平瓦観察表



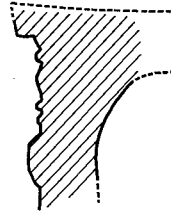
第 8 図 軒丸瓦拓影・実測図



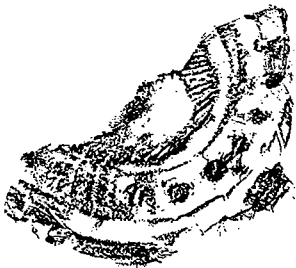
NM-5



NM-6



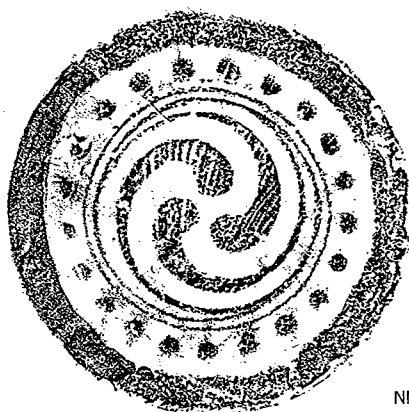
NM-7



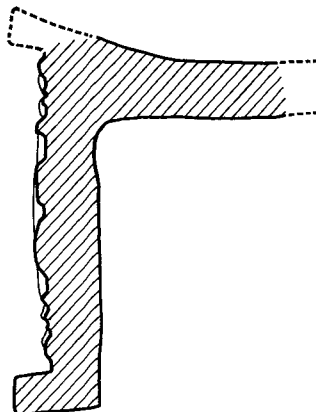
NM-8



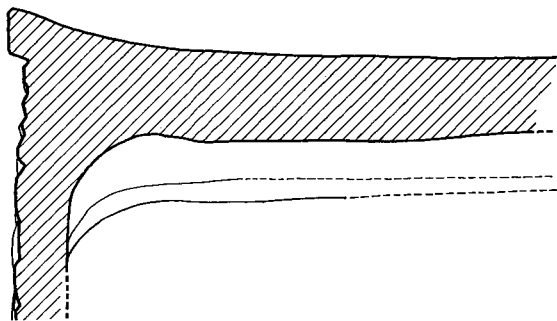
第9図 軒丸瓦拓影・実測図



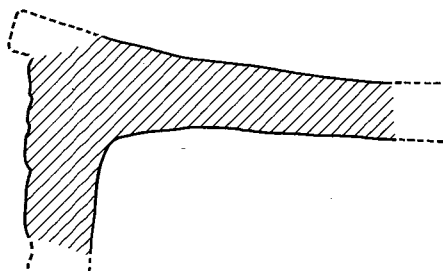
NM-9



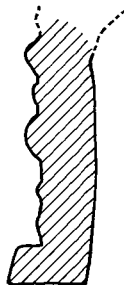
NM-10



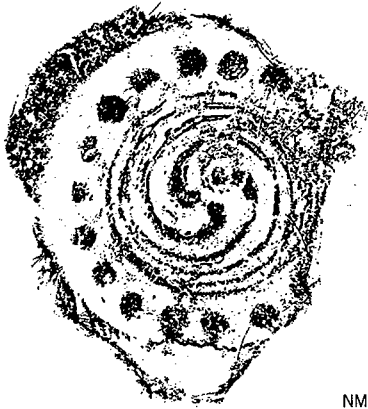
NM-11



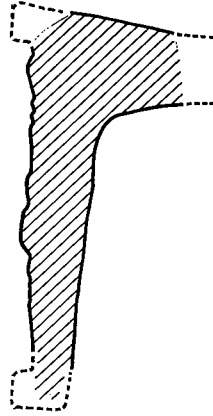
NM-12



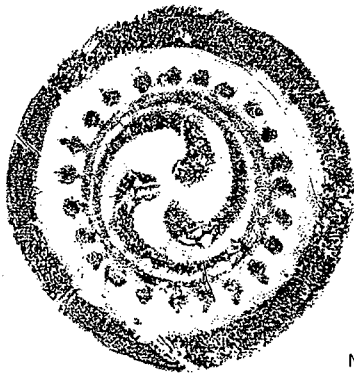
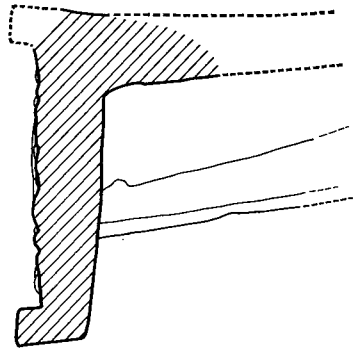
第10図 軒丸瓦拓影・実測図



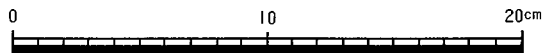
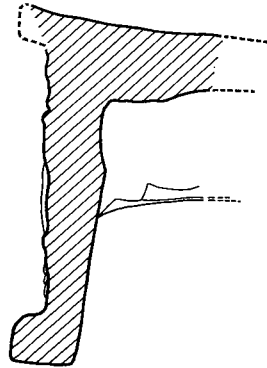
NM-13



NM-14



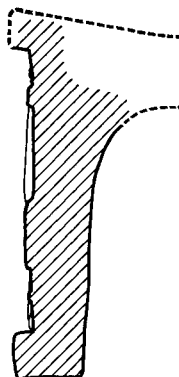
NM-15



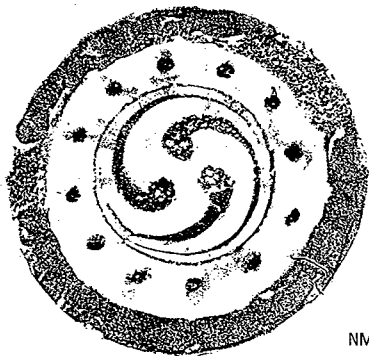
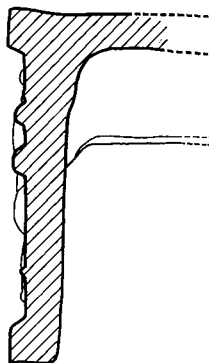
第11図 軒丸瓦拓影・実測図



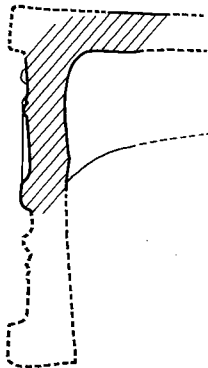
NM-16



NM-17



NM-18



NM-19



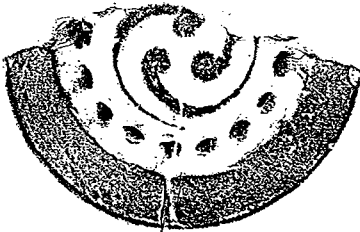
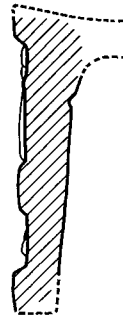
第12図 軒丸瓦拓影・実測図



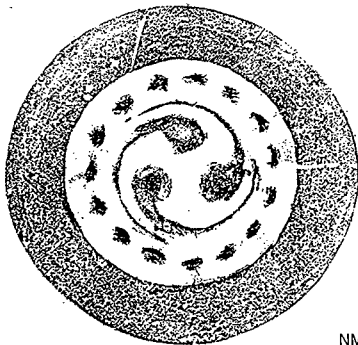
NM-20



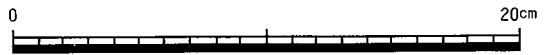
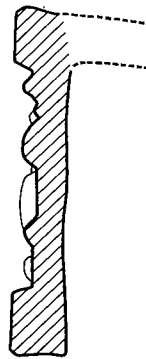
NM-21



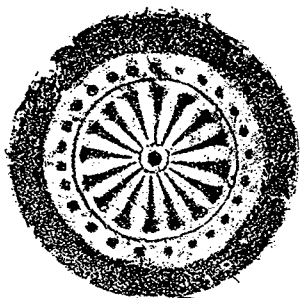
NM-22



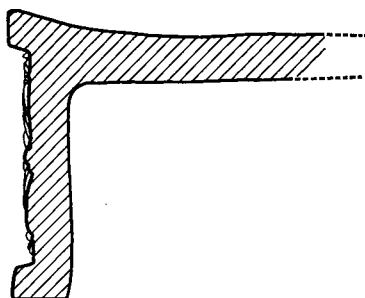
NM-23



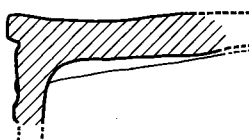
第13図 軒丸瓦拓影・実測図



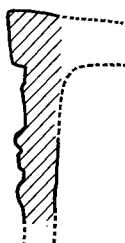
NM-24



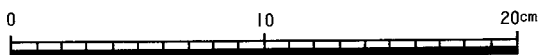
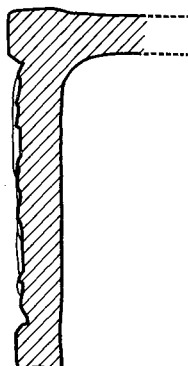
NM-25



NM-26



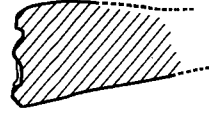
NM-27



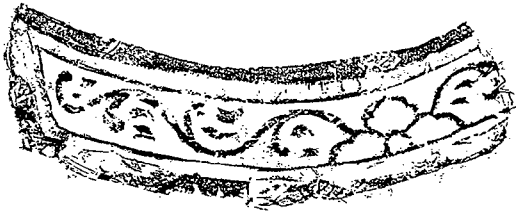
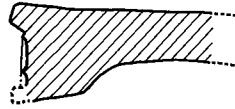
第14図 軒丸瓦拓影・実測図



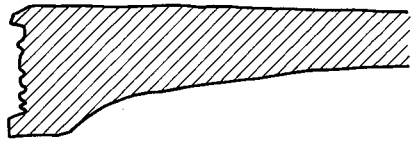
NH-1



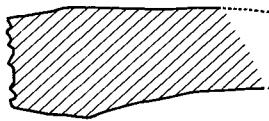
NH-2



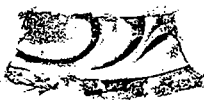
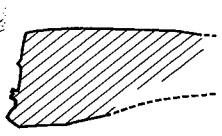
HN-3



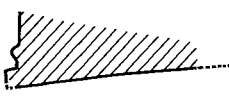
NH-4



NH-5



NH-6



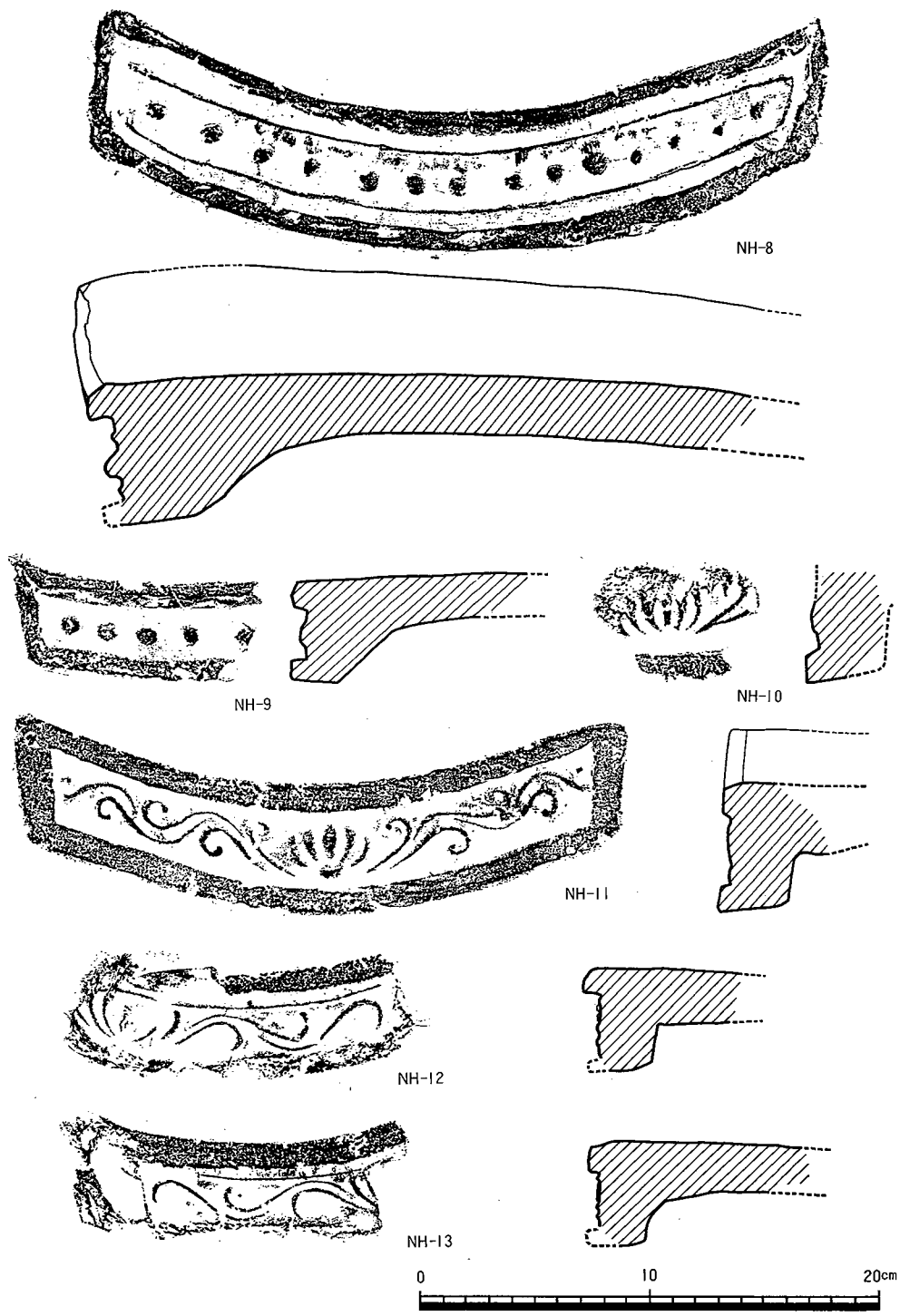
NH-7



0

20cm

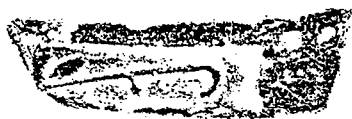
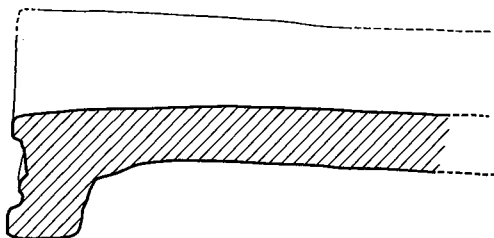
第15图 軒平瓦拓影・実測図



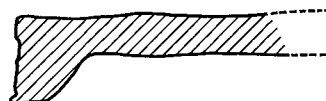
第16図 軒平瓦拓影・実測図



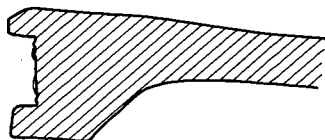
NH-14



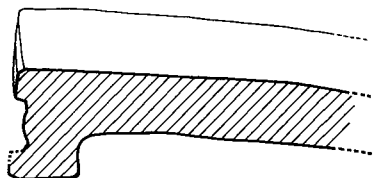
NH-15



NH-16



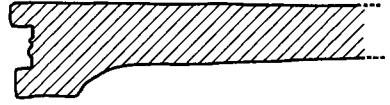
NH-17



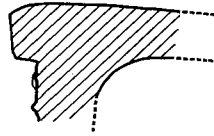
第17图 軒平瓦拓影・実測図



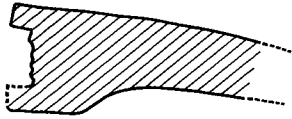
NH-18



NH-19



NH-20



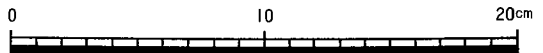
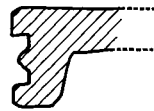
NH-21



NH-22



NH-23



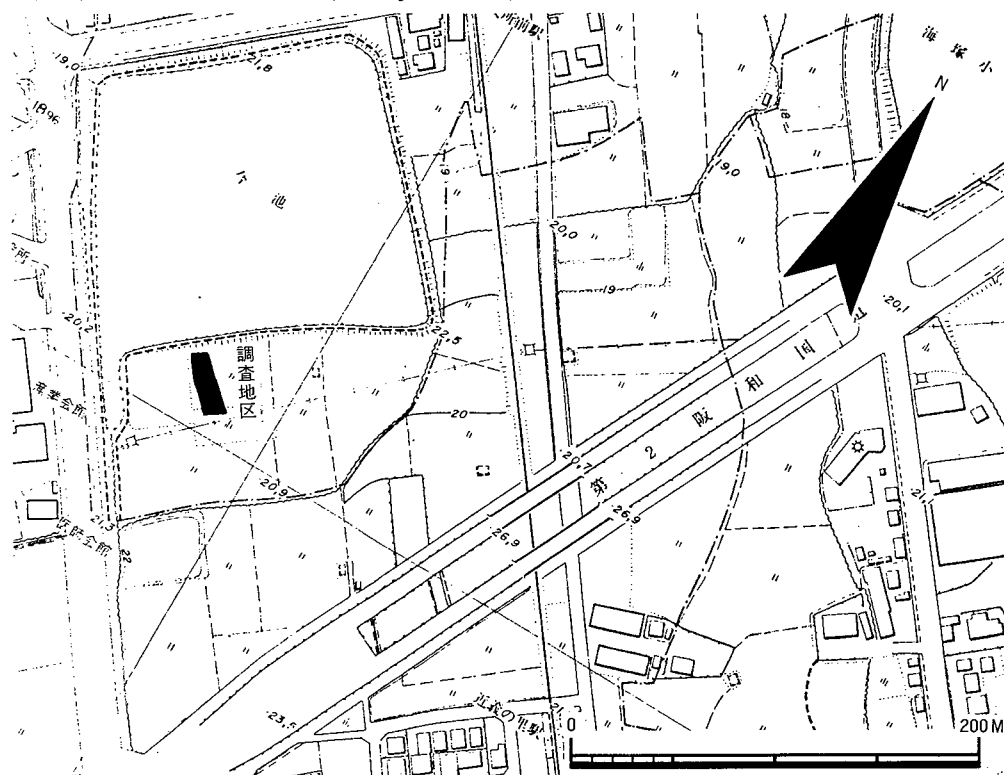
第18図 軒平瓦拓影・実測図

第三章 仮称今池遺跡の調査

第一節 位置と環境

本調査区は貝塚市畠中1-831番地に位置し、現状は水田耕作地となっている。発掘調査は開発予定面積約3,000㎡のうち約300㎡を調査した。

調査地は貝塚市役所北東部前方に所在する今池の南東部に接した地域で周知の遺跡として広範囲におよぶ加治・神前・畠中遺跡とは近接するものの現在まで遺跡としてのマークが示されていなかった地域でもある。加治・神前・畠中遺跡は前述第一章でも記したよう



第19図 調査位置図

に弥生～室町時代にかけての遺跡であり、昭和56年度に大阪府が実施した都市計画道路貝塚中央線の発掘調査において古墳時代～室町時代にかけての遺構を数多く検出しており、各時代の遺跡のあり方がかなり明確にされてきた遺跡である。

本調査区で検出した遺構についてはその立地条件から新たな遺跡とするよりは加治・神前・畠中遺跡内の一画と考え得るが、今回は整理の都合上仮称とはしているものの今池遺

跡として扱うことにしたい。

第二節 遺 構

調査区の設定は開発予定面積が約 3,000 m²にもおよぶということから、遺構確認調査として開発予定地内に幅約 2 m、総延長約 120 m の試掘堀を設定し確認調査を実施した結果、ほぼ敷地中央部で溝状遺構を検出したため遺構の性格を把握することを目的として不定形ではあるが幅約 10 m、長さ約 30 m の調査区を新たに設けて発掘調査を実施していった。

遺構検出面までの基本土層は現状が水田耕作地となっているため約 0.15 m の第 1 層耕作土下約 0.05 m の第 2 層床土を検出し、以下第 3 層茶灰色砂質土、第 4 層黄灰色土が約 0.2 m ずつ堆積しており黄色土遺構検出地山面に達し、海拔約 19 m を測る。なお、第 3 層茶灰色砂質土および第 4 層黄灰色土はともに出土遺物、土層状況から中世～近世にかけての水田跡と考えられる。

検出遺構は第 20 図に示すように溝状遺構を合計 6 条検出しており、以下個々の検出遺構について若干の概要を示すことにする。

溝 1

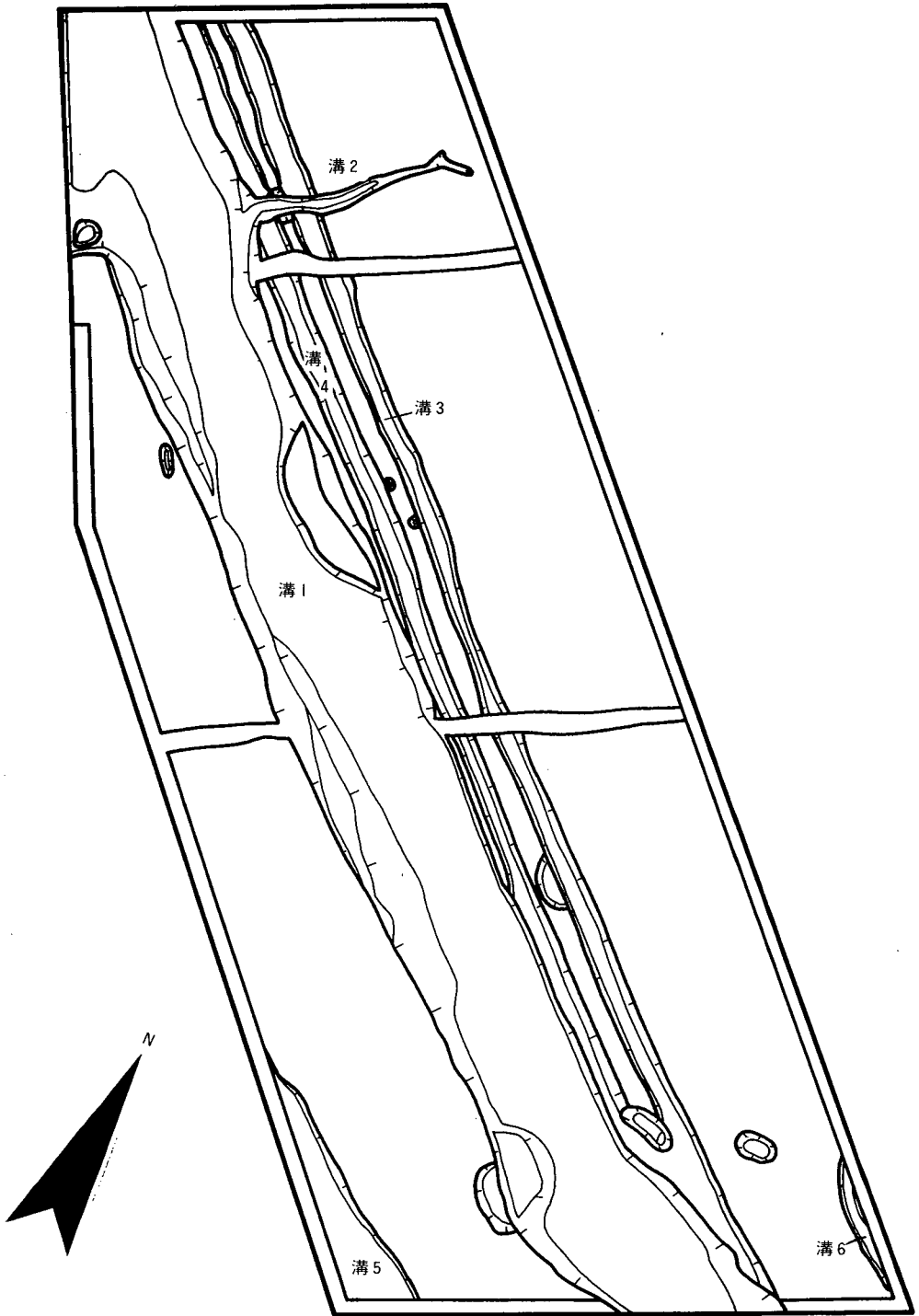
幅 2.5 ～ 3.0 m、深さ 0.8 ～ 1.2 m、確認総全長約 30 m を測り、南東方向より北西方向に水流をもち断面 U 字形を呈している。溝はほぼ直線的に施設されているが調査区南東部になると若干東寄りにカーブしているが、溝の幅・深さについてはあまり変化が認められない。また、第 22 図に示すように溝内断面土層より少なくとも 3 時期にわたる水流の跡が認められ、その中でも少なくとも 1 度は大規模に人為的改修を行っている。

溝 2

調査区北西部で検出した小溝である。中近世における削平がかなりきついためか残存状況が悪く、調査区北西隅でとぎれやや不鮮明となる。規模は溝幅 0.1 ～ 0.4 m、残存する深さ 0.05 ～ 0.25 m を測り溝 1 にほぼ直交する形で取り付いている。时期的には出土遺物がほとんど検出されなかったものの溝 1 内第 7 層黒灰色泥砂層と同一埋土であることから溝 1 の一時期と同時期のものと考えられる。

溝 3・4

溝 1 の北側でそれぞれ検出した溝で両者は約 0.5 m の間隔をもち平行して走る。両者とも溝幅 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m を測り、調査区南東部で溝 1 と切り合いを有するがほぼ平走している。溝 1 との切り合い関係から溝 3・4 両者は溝 1 よりも新しい。出土



第20図 遺構実測図

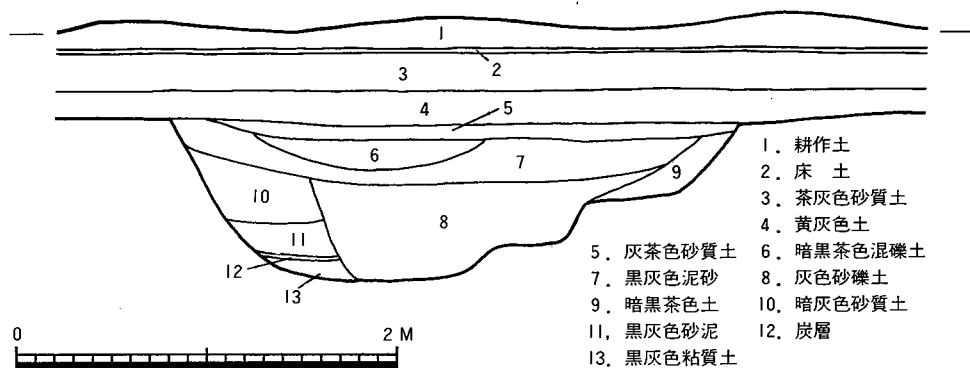


図21 溝1土層断面図

遺物は両者とも若干の土師器片を検出したのみで時期的にはやや不明確であるが両者とも同時期のものと考えられる。

溝 5

調査区南東隅で溝1より約3 m隔たりほぼ平行して走る溝である。規模については調査区域外へのびているため溝幅および深さ等明確には捉えられていない。また、出土遺物もまったく検出されていないため時期についても不明である。

溝 6

調査区南東部、溝1の北側で検出した溝であるが残存状況が非常に悪く不明確である。規模は概ね幅約0.35 m、残存する深さ約0.05 mを測り弧を描くようにカーブするが性格についてはまったく不明である。

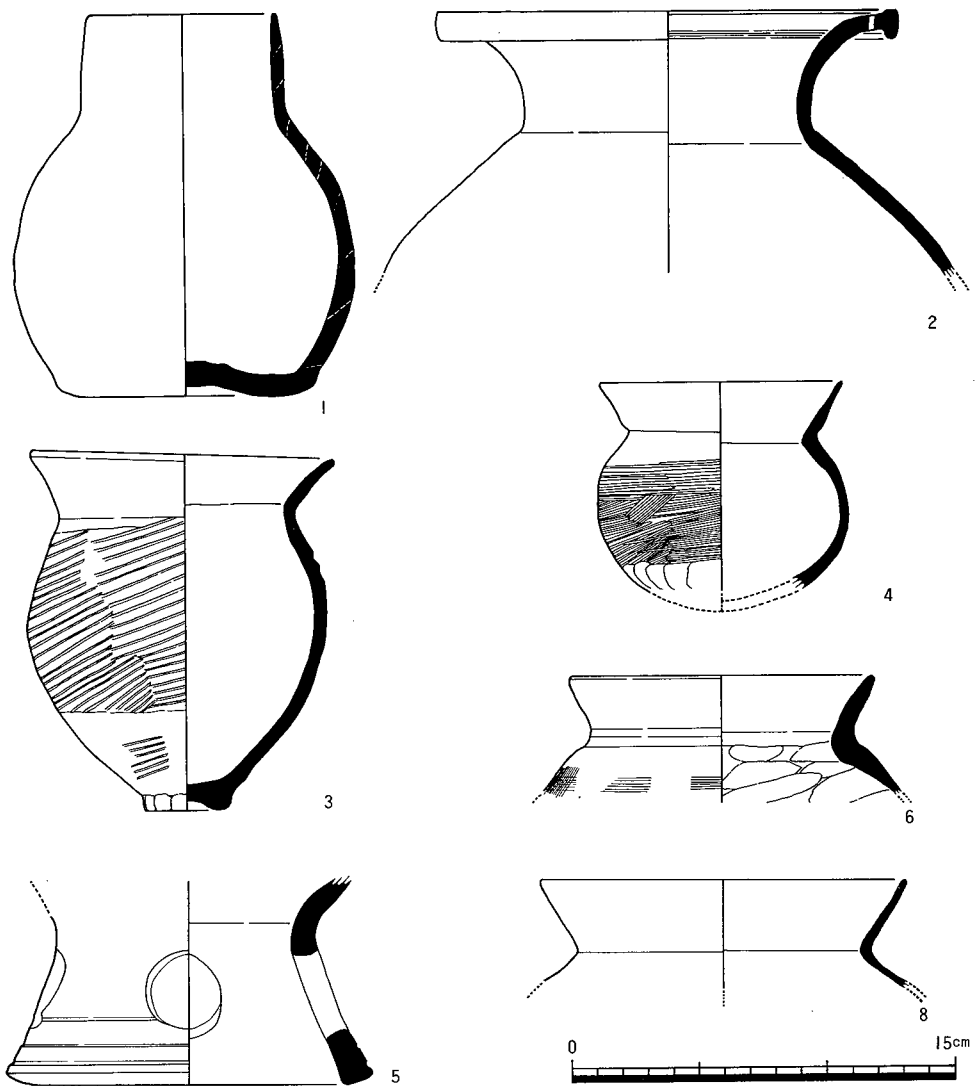
その他、出土遺物等も無く不明確な点が多いことから詳細については記していないが、土壇状遺構等も若干検出している。

第三節 遺 物

今回の調査で出土した遺物は総出土量としては少なく遺物整理箱約3箱分であり、かつ遺構に伴う一部の土器類を除いては大半が第3層茶灰色砂質土、第4層黄灰色土内の出土である。

遺構内出土遺物としては時期判断の可能な土器類が出土している溝1のほかはほとんど実測可能といえる出土遺物を有する遺構はないことから今回は溝1内出土遺物について一部図示するとともに若干の概要を示すにとどめている。

溝1内出土の遺物は第6層暗黒茶色混礫土内および第8層灰色砂礫土内よりそれぞれ出



第22図 溝1出土遺物実測図

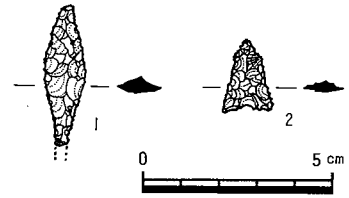
土している。第6層暗黒茶色混礫土は溝1の水流を示す最終段階にあたり6世紀後半代に比定しうる須恵器杯蓋・身片とともに器形不明の土師器片が若干出土している。第8層灰色砂礫土内出土遺物は第22図に示す土器類が出土しており、器種は土師器壺・甕・器台および小形丸底壺等である。なお、須恵器の出土は確認されていない。第8層灰色砂礫土を埋土とする溝の時期はこれら出土遺物より5世紀を境として相前後する時期のものと考えられることから、溝1は少なくとも幾度かの改修を受けながらではあろうが5世紀前後より6世紀後半ごろまでは存在していたと思われる。その他の出土遺物として第4層黄灰色土内出土ではあるが弥生時代のものであると考えられる石鏃および石錐がおのおの1点ずつ出土

していることから付近には弥生時代にまで遡る遺構が存在する可能性をも示唆するものと思われる。

第四節 ま と め

今回の調査で検出した遺構および出土遺物について重要な点としては少なくとも5世紀を前後とする時期に施設されていたと思われる溝1の存在である。調査の結果から当開発予定地域内では溝1の存在と直接的関連を有する住居跡等、その他の遺構は存在しなかったが、溝1の検出状況および周辺地形から考える時、農業灌漑用施設あるいは集落を界する施設かと考えられることから周辺部には当時の水田耕作地や集落跡が存在するものと思われる。ただ、溝1内第8層灰色砂礫土内出土遺物はそれぞれ一土層内での出土ではあるが、それぞれ個々の遺物において若干の時期差を有するものであり、一部は4世紀代にまで優に遡るものと思われる。

いずれにしても、今後周辺地域の調査の実施において十分な整理・検討を加えることにより近接する加治・神前・畠中遺跡とともに当時の集落の具体的な歴史像が明確にされるものと思われる。



第23図 石器実測図

圖

版



調査区全景

北東より



建物2

南西より



建物1・溝1

北東より



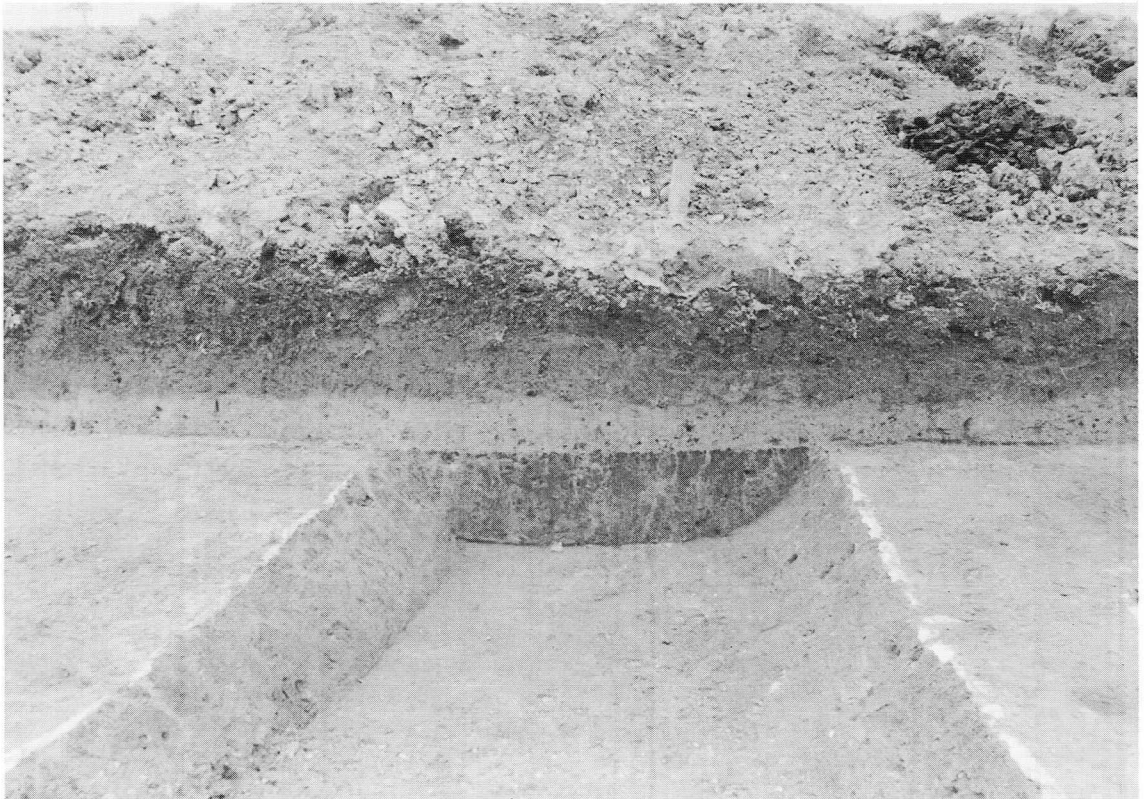
同上

北西より



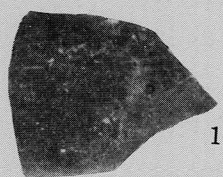
ピット20内遺物出土状況

東より



溝1土層断面

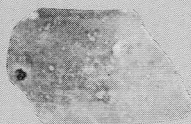
南東より



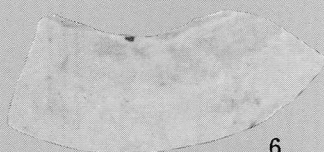
1



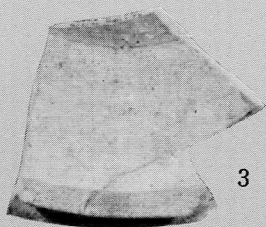
5



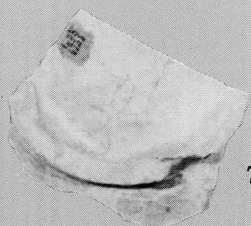
2



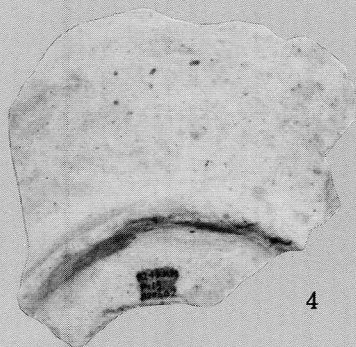
6



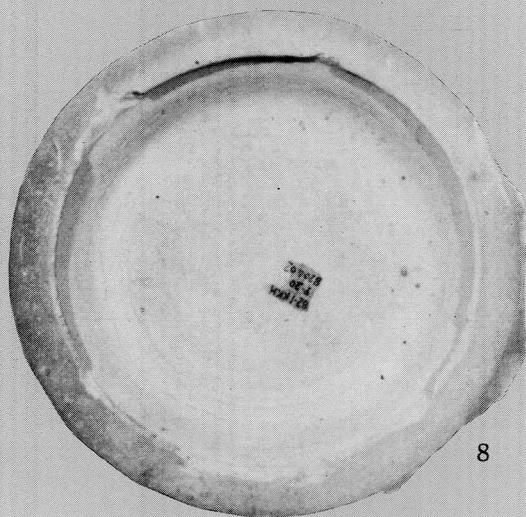
3



7

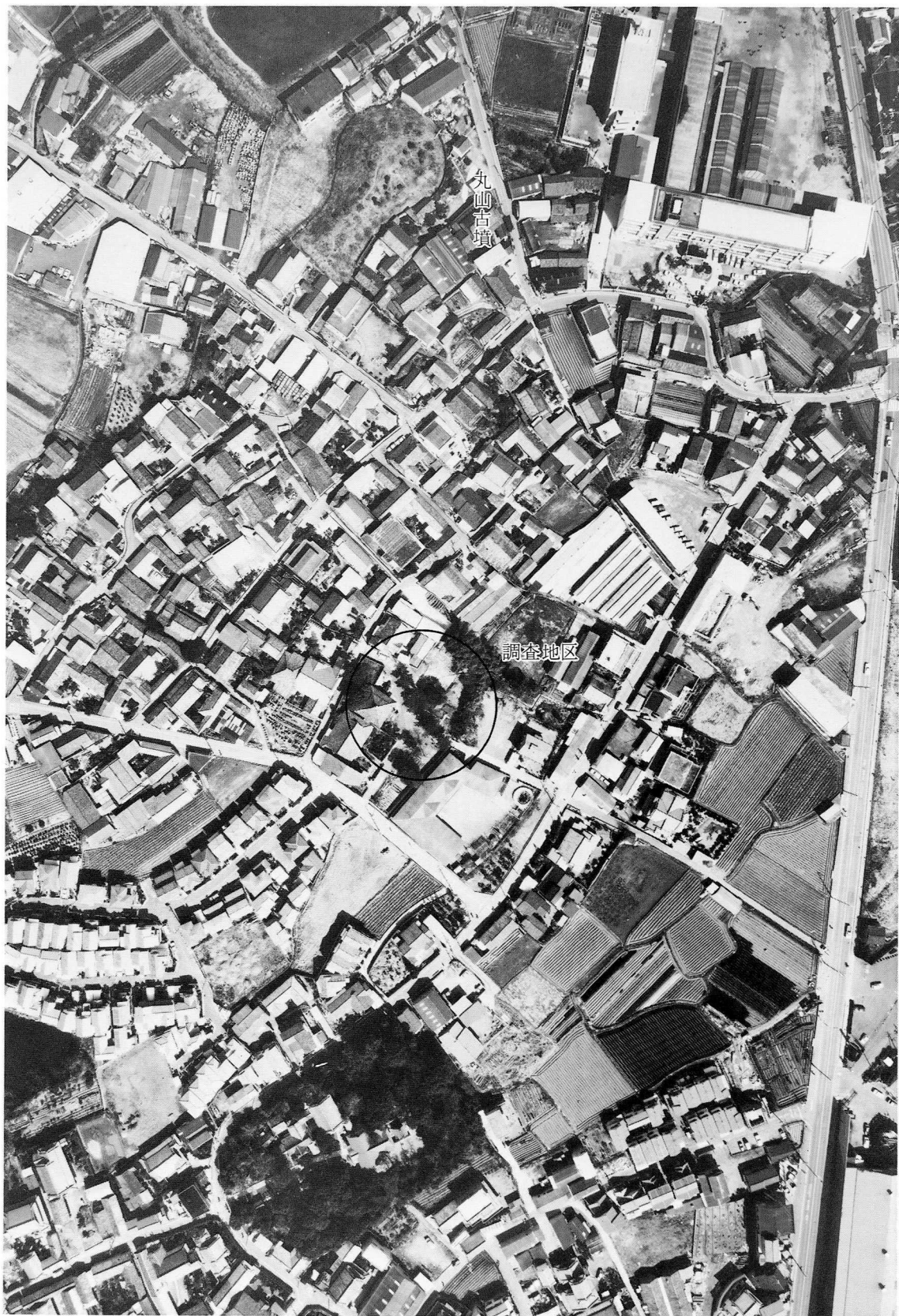


4



8

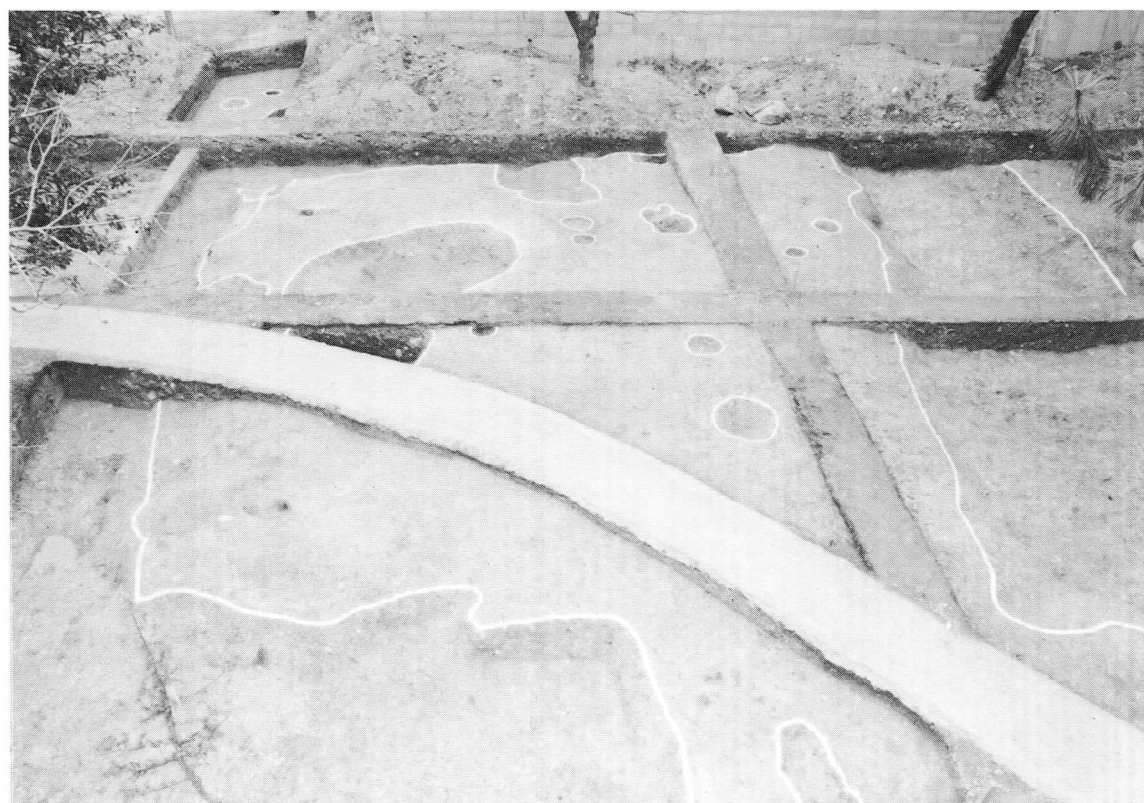
図版5 地藏堂廃寺跡 航空写真





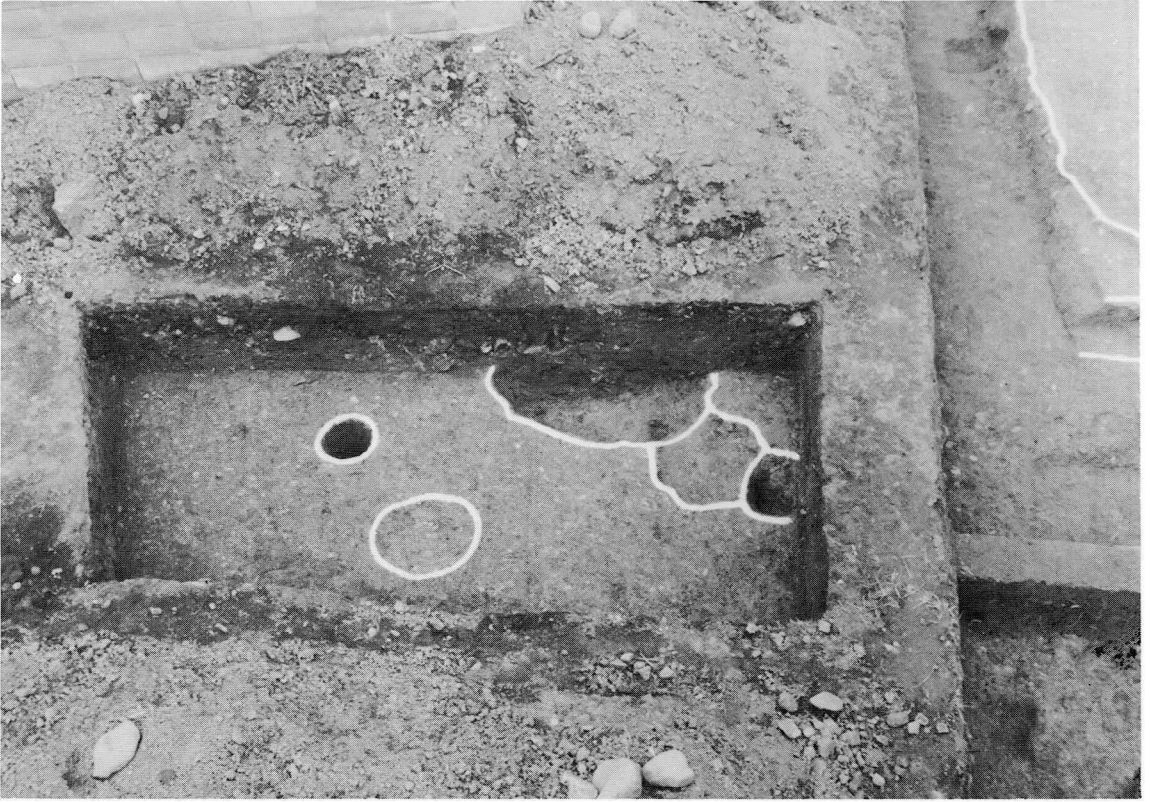
遺構全景

南東より



同上

南より



C区全景

西より



D区全景

北より



A区近世基壇瓦堆積状況

北より



同上 部分

南より



F区全景

北西より



G区全景

東より

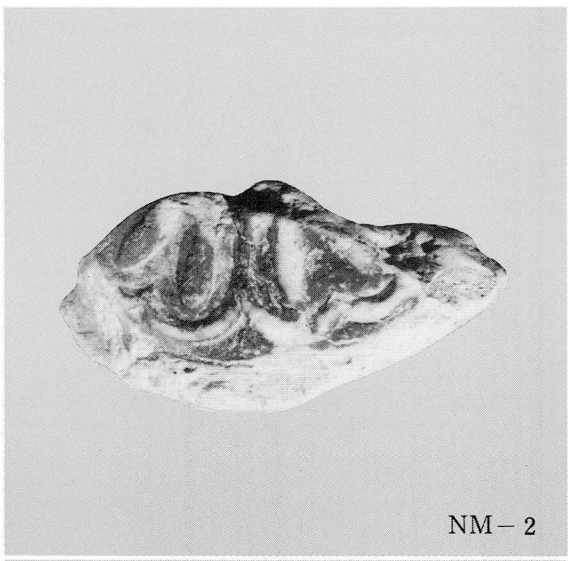


NM-1

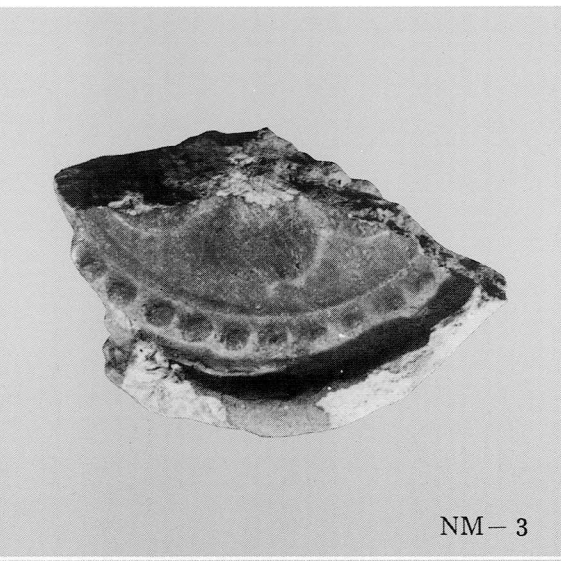


NM-4

軒丸瓦



NM-2



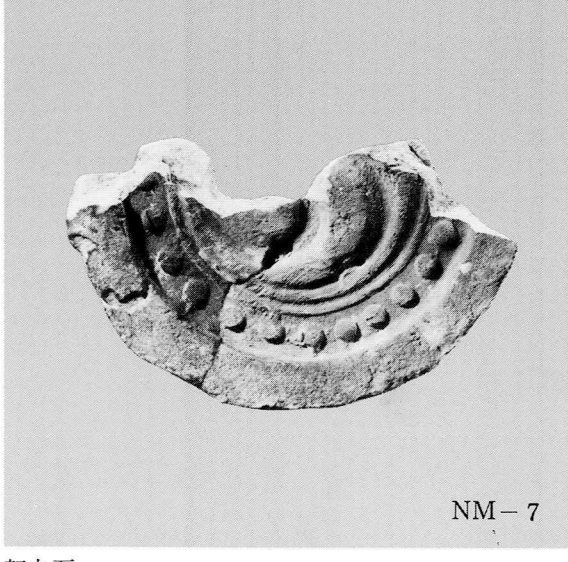
NM-3



NM-5



NM-6



NM-7



NM-8



NM-9



NM-10



NM-11



NM-12



NM-13



NM-14



NM-15



NM-16



NM-17



NM-18



NM-19



NM-20



NM-21



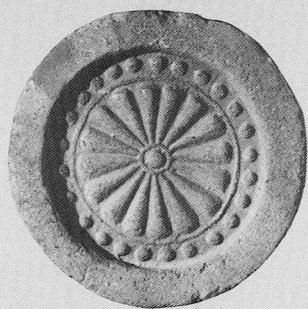
NM-22



NM-23



NM-27



NM-24



NM-25



NM-26



NH-1



NH-2



NH-3



NH-4



NH-5



NH-6



NH-7



NH-8



NH-11



NH-9



NH-10



NH-12



NH-13



NH-14



NH-16



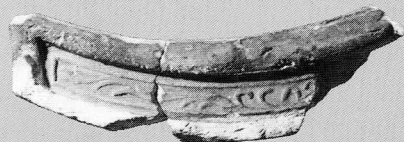
NH-17



NH-15



NH-18



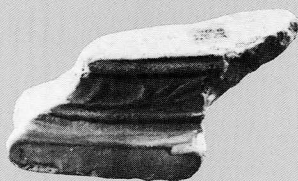
NH-19



NH-20



NH-21



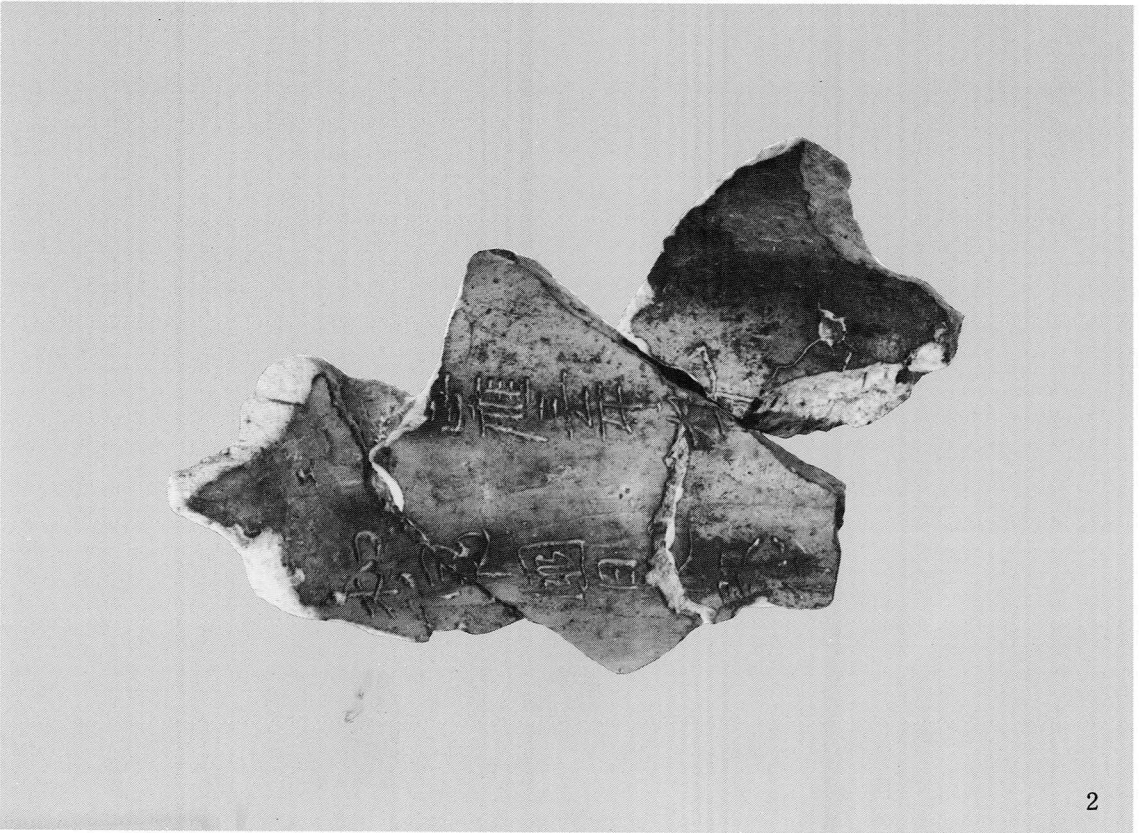
NH-22



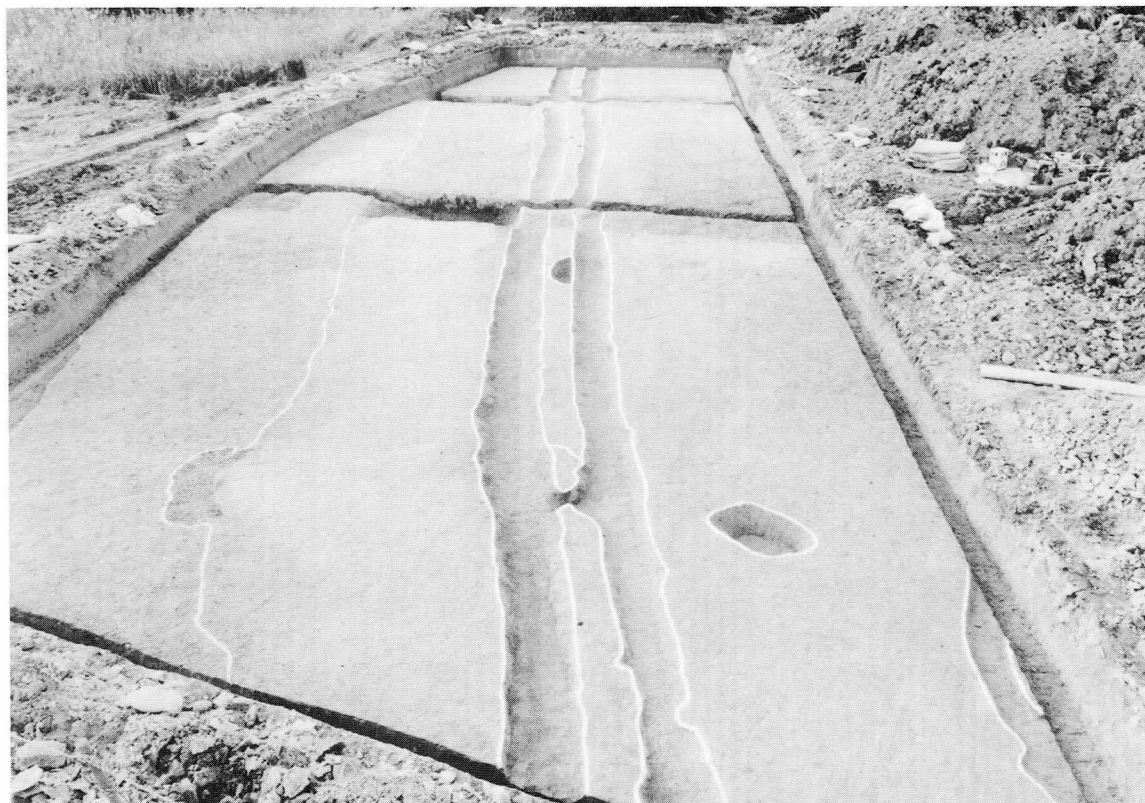
NH-23



NH-24

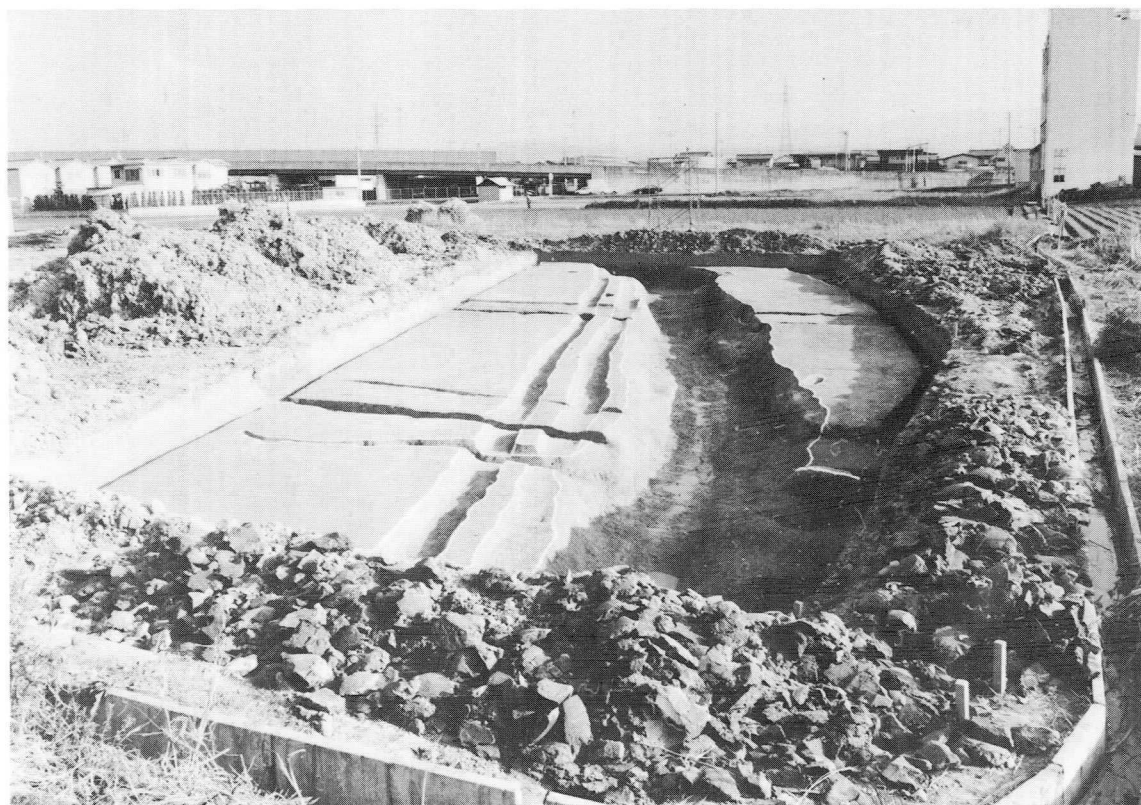


文字瓦



遺構検出状況

南東より



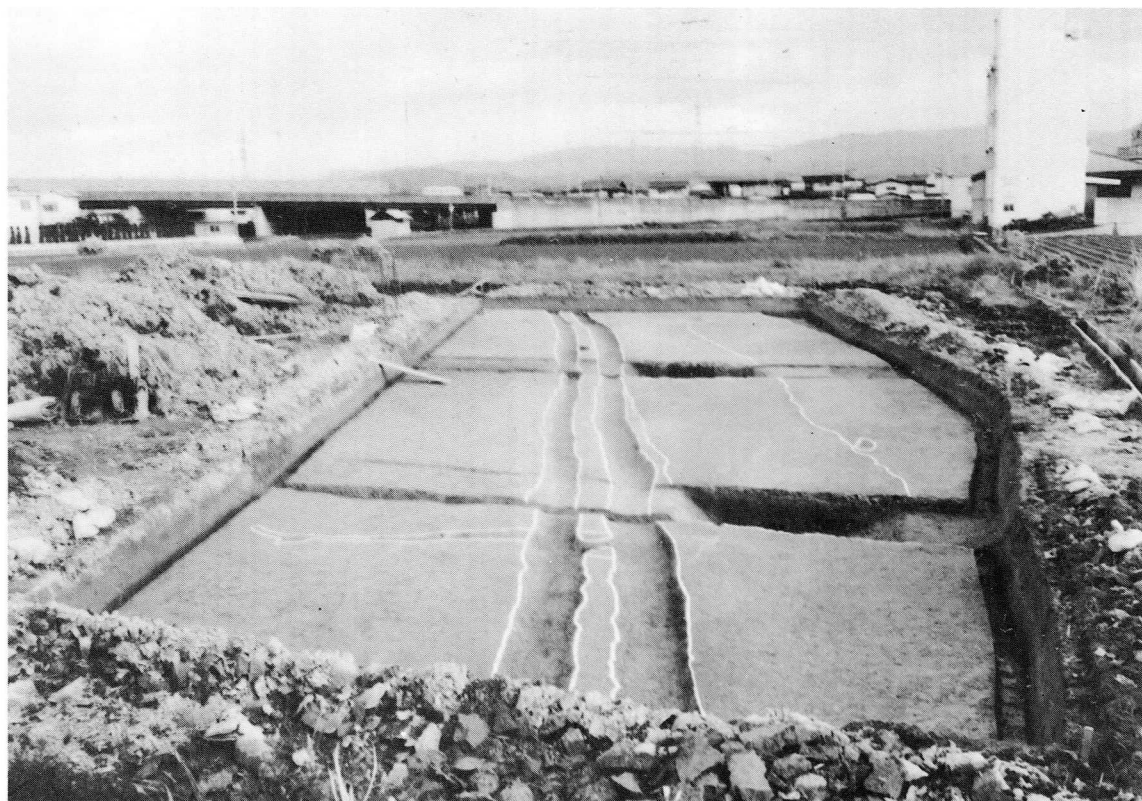
同上

北西より



遺構全景

南東より



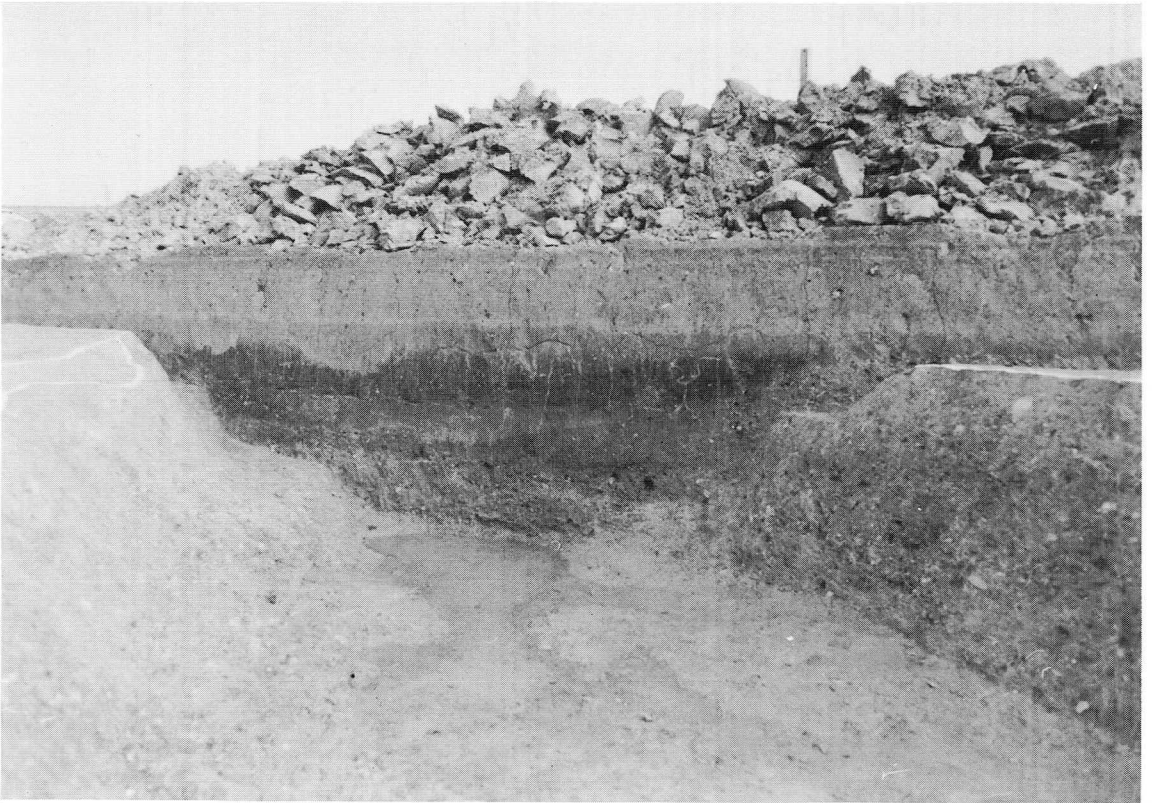
同上

北西より



溝 1・2

南より



溝 1 内土層断面

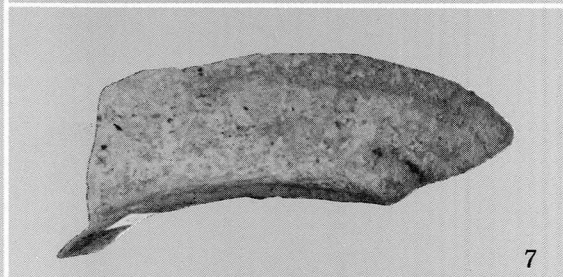
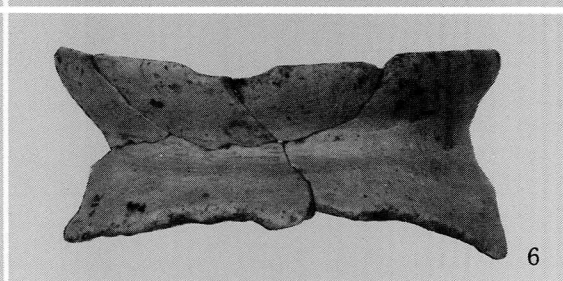
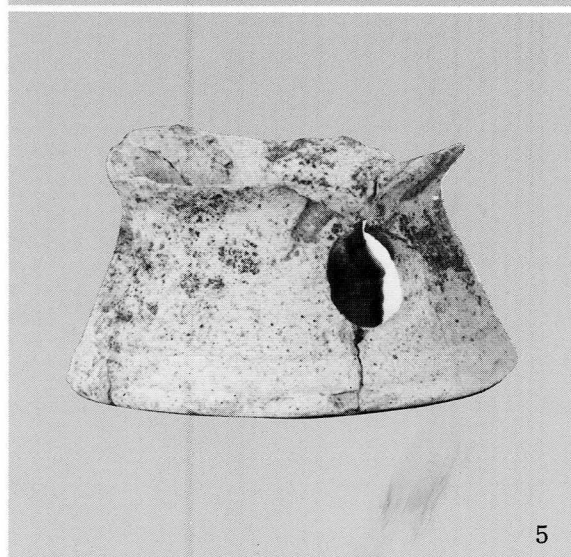
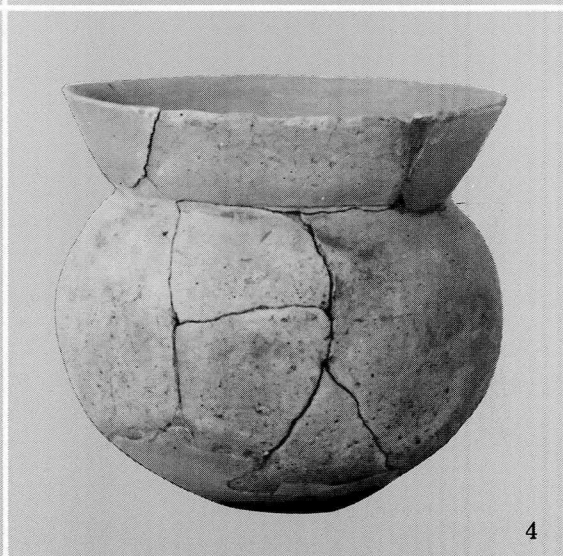
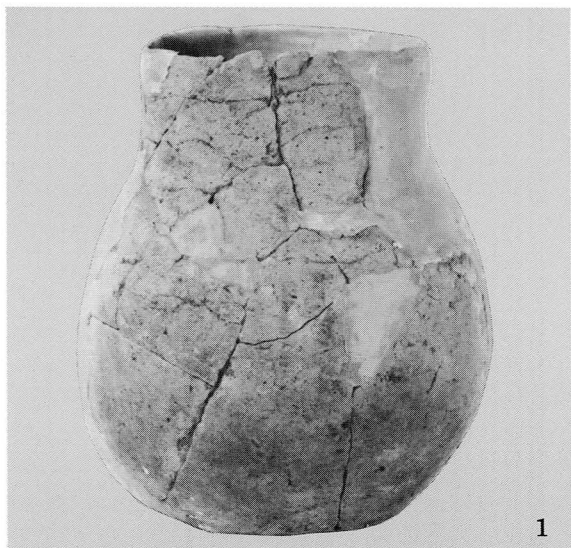
北西より



溝 1 内遺物出土状況（小形丸底壺）



溝 1 内遺物出土状況



溝1 出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告第7集

貝塚市遺跡群発掘調査概要V

印 刷 昭和58年3月25日

発 行 昭和58年3月31日

編集・発行 貝塚市教育委員会 〒597

大阪府貝塚市畠中1-17-1

印 刷 (株)近畿出版印刷

大阪市北区黒崎町11-14